
Hide-and-Seek

稀春

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Hide-and-Seek

【Nコード】

N9901W

【作者名】

稀春

【あらすじ】

目が覚めた時、少年は並行世界に跳ばされていた。かつて少年がいた世界とよく似た世界。——でも、その世界の人は傷つけられることも殺されることもなかった。ただ例外として、少年のように並行世界から跳んできた者だけは人を傷つけることができた。そんな世界で少年は一人の少女と出会い、日々を生きていく。

この小説は同人サークル「Melodious Combat」のHPでも公開しています。

Hello, world

時間が解決する、という言葉が嫌いだった。苦しみに耐えて、いつかその痛みが癒える時が来るのを待つことが。行動を起こせないのを言い訳にして、ありもしない奇跡に縋っているように思えて。待つのではなく、自ら進みたい。一秒でも、一瞬でも、その時間をしっかりと噛みしめて。

——時間は何も解決しないのだから。

——叩きつけるように、歌っていた。

狭いステージ。照明は肌を焦がすほどに熱い。客席を見渡せば、狂ったように手を突き上げ、頭を振り回す連中。

——泣き叫ぶように、歌っていた。

ドラムの音が、ベースの音が、心臓に突き刺さる。それを頼りに弦を掻き鳴らす。音の洪水。ロック。

——求めるように、歌っていた。

どれだけ歌っても、何かが足りない気がした。埋まらない心の隙間。……求めている？ 何を？ 誰を？

「く……。……くん」

「……」

頭上から声が降ってきて、久遠輝はまどろみから覚めた。

「やっと起きましたか、久遠」

眩しさに顔をしかめながら薄目を開けると、そこには一人の少女が立って輝を見下ろしていた。

「またこんな所で寝ていたのですか？ あなたは」

こんな所、と言われて自分がどこで寝ていたのかを思い出す。マンションの屋上だ。ちよつと休むため横になったつもりが、いつの間にか眠りに落ちてしまったようだ。

「太陽が良い具合に当たるんだな、これが」

横になったまま、言い訳を試みる。五月の日差しは柔らかで心地良いのだ。

「……風が強いです」

「おかげで寝苦しくない」

輝のどこか気の抜けるような言葉に、少女——かしゅわかな華秋和奏は腰程まで伸びた長い髪を抑えつつ、小さくため息を吐いた。

「そうですか。まあ、どうでも良いですが。……それより」

「ん？」

ばつさりと話を切られ、何か用事でもあったのかと思い輝は身を起こした。目が合う。端正な顔つきに透き通った瞳。体つきは華奢でいて人形のような、と輝は日頃から思っている。そして何よりも目を引くのは長い銀色の髪である。太陽の光を浴びて、幻想的に輝くその髪を見ていると、彼女が物語に出てくるお姫様のように思える。

思わず見とれていた輝に和奏が告げた。

「時間、大丈夫ですか？」

まさか、と思いつつも輝は時計に目をやり、そして絶望した。

「うお！ バイトの時間、過ぎてる！」

「やはり、そうですよね」

取り乱す輝に対してあくまでも冷静な和奏。そもそも和奏は感情をあまり顔に出さないから分かりづらいのだが。

「必要な荷物は準備しておきました。今更焦っても遅刻には変わりないので、せいぜい死なない程度に急いで行ってください」

慌てて立ち上がった輝にバイト用のリュックが手渡される。

「サンキュ！ んじゃ行ってくる！」

感謝の言葉を投げつつも輝の足はもう動き出していた。死なない程度に急いで。

久遠輝はフリーターである。ニートではない。何故なら親からは金を一円も貰っていないからだ。そして輝はアルバイトで生計を立てているからだ。

中学を卒業したあと高校には進学せず、かといって職にも就かず、ただ明日を生きるためにバイトで生計を立てている。こんな自分なんかとまともに付き合ってくれる人は、和奏と、輝と同じく中卒である同級生の男ぐらいのものだ。

とにかく、久遠輝は齢十八にしてフリーターの男だった。

その後、当然の如く輝はバイト先ではこつ酷く叱られた。それでも和奏が起こしに来てくれなかったらもつと処分は重かっただろう。今のバイトは時給が良いから、やめさせられるわけにはいかない。やめさせられたら、金がなくなる。金がなければ、飯が食えない。飯が食えないと、生きていけない。——簡単な式だ。

そのバイトの帰り道で、コンビニ帰りと思われる和奏を発見した。

「よ、和奏。買い物か？」

「久遠。ええ、夕飯を買いに」

後ろから声をかけると、長い髪を翻して和奏が振り向いた。横に並んで歩くと、なるほど、ビニール袋の中には弁当が入っている。

「相変わらず料理は苦手なんだな」

「料理をする必要性が感じられません」

少しだけムスツとした返事が返ってくる。心なしかいじけているようにも見えて、輝はなんとなく微笑ましい気分になった。表情の

変化は薄くてもちゃんと彼女には感情があり、そして輝は時折見せる彼女の表情を楽しみにしていた。

「あなただって、料理はしないでしよう?」

「……そりゃそうだ」

和奏の反撃に輝はたじろぐ。飯は最低限食えれば良いと思っているため料理はロクにせず、和奏と同じくコンビニやレトルトのお世話になっている身だ。

「一人暮らしは大変だな」

「お互い様、です」

和奏は輝と同じマンションの住民で、一人暮らしをしている。輝が二年半程前に引っ越してきて以来、色々縁があって今でもこうやって偶に会って話をする仲である。

それきり和奏は口を閉ざしたため、自然と会話が途切れた。和奏は無口なタイプなため、こういった会話のない時間が二人にはよくある。気心の知れた二人の、無言が心地良いというシーンは定番だが、輝にとってはそんな大げさなものじゃなく、ただ真っ白で居られるという気分である。気負いとか、遠慮とか、配慮とか、そんな余計な物が削がれたような。

結局これを心地良いって言うのかな、と輝は思う。

「……」

そして、そんな静かな空間では色々なことをぼんやりと考えてしまふものだ。

街灯がぼんやりと照らす道を歩く、同い年の二人。一人は現役の学園生。片や、現役のフリーター。

我ながらシニールな光景かも、と自嘲気味に思う。

「……何か?」

「うん?」

「いえ、何かくだらないことを考えているような目をしていたので」「くだらないと断定かよ。……ただ、和奏は学園生なのにさ、俺はフリーターだなあって思っただけ。実際、端から見たらどうなんだ

ろう？」

「くだらない」

気持ちの良いくらいあっさりと一蹴される。

「他人の目など気にするような性格ではないです、あなたも、そして私も。そんなことを考えている暇があったら、もっと有意義な時間の使い方をしてください」

「何、拗ねてるんだよ……」

「拗ねてなどいません。あー、くだらない、くだらない。誰か面白い話を聞かせてくれないでしょうか」

夜空を見上げ手を後ろに組みながら、和奏は何ら声色を変えることもなく言う。

「めちゃくちゃ棒読みだな。それじゃ話を変えて、と。昼間はありがとうな。おかげでクビにはならなかった」

「そうですか、それは幸いでしたね」

「ああ」

「……………」

「……………」

「……………あなたに面白い話を期待した私が馬鹿でした」

「ああ」

輝と和奏の関係はいつだってこんなもんだ。……でも、そんな関係が心地良いつて言うことなのだと輝は思っている。そしてきつと和奏もまたそうなのだ。

翌日。バイト帰り。マンションのエレベーター内。

輝は俄かには信じがたい状況に直面していた。

「ありえねえ……」

エレベーターのボタンが一つ増えていた。

「エレベーターのボタンが一つ増えている」

狭い空間の中で、思ったことを口に出して確認してみる。紛れも

なくボタンは一つ増えていた。

一、二、三、四、五、六、七。

自分の住む部屋の階が六階で、このマンションは六階建て。つまり最上階だ。ここは日本であってヨーロッパや台湾じゃないのだから、日本の感覚で七階のボタンを押すと六階に着く……なんてことはない。それにも関わらず、さも「最初からここにありましたか、何か？」とでも主張するかのように、六という数字の上には七と書かれたボタンがあった。

屋上へ直通するように改修でもされた。つまり、七〓屋上ということ。それが一番現実的かもしれないが、輝はこの屋上を良く利用している。あそこへは階段でしか行けないし、仮にそのような工事を行ったとしたら気づかないはずがないのだ。

「マジありえねえ……」

どこの若者だ、と自分自身に突っ込みを入れたような感想しか漏らせなかった。

もちろん、わざわざこんな正体不明のボタンを押さずに六階へと行っても良いのだけれども、しかしだからと言って全く興味がないわけではない。

そう。ひよつとしたら、ずっとこういった刺激を求めていたのかもしれない。

変わらない日常。何か足りない気がする日常。——それをぶち壊すような突拍子もない出来事を。

過去に一度挑戦して、失敗した。自分自身が壊れてしまったのだ。もうこのような機会はないのだと諦めかけていた。

「時間は何も解決しない」

それが輝の心情だ。待つのではなく、自ら進め。

「……………行け！」

そして輝はボタンを押す。押した。押してしまった。

七。——当ても、果てもない、行き先を。

動き出したエレベーターは、普段と何も違いは見られない。

そしてそのまま六階を――通過した。

「……えっ！」

その瞬間、エレベーターが激しく揺れ始めた。横揺れ、続いて縦にも。

「うわっ……！」

故障か、大地震か。どちらにしても異常な程にエレベーターは揺れ続ける。……しかし、その二つ予想はどちらも不正解だった。

それを裏付けるかのように、最大の変化が、来た。

――何が来たのか？ 端的に言うならば“加速”だ。

「ぐああああ！」

空気を引きちぎりながら、エレベーターは上へ上へと加速する。

明らかにマンションの高さを越えても尚、そのスピードは微塵も緩む気配がない。

――加速する。

凄まじい大きさの重力に押さえつけられた輝は、あっという間に立っていらなくなり、床に張り付くように四つん這いにさせられた。

――加速する。

何なんだよ、これはっ！

そう叫びたかった。いや、実際叫んだのだが、声は轟音と圧力に掻き消され音にならなかった。

――加速する。

やがて口を開くことさえ叶わなくなる。文字通り身動き一つ取れない。

……どれほどの時間が過ぎたのだろうか。輝の思考の端には諦念が生まれつつあった。助からない、という。最早上がっているのか飛んでいるのか、それすら分からない。

《俺は、お前に、謝らない》

不意に、聞き覚えのあるような声が聞こえた。とても身近で耳にしているような声。

その声を捕える感覚器官は、しかし、聴覚ではない。直接頭の中に語りかけられているような気がする。

《大体、来るのが遅すぎなんだよ》

何のことだ……。そう言おうとしたが、相変わらず音にはならなかった。

《もう、待たせるな。会いに行け。その権利を持つのはどの世界にもただ一人しかない。俺じゃない……。ましてや他の誰かでもない。お前だけだ、久遠輝。お前が会いに行くんだ》

この声をどこで聞いたのだろうか、思い出せない。この男が何を言っているのかも分からない。意識が酷く歪む。

《Hello , world》

——そこで輝の意識は途絶えた。落ちていく。

「プロローグ Hello , world 完」

Hello, world (後書き)

閲覧して頂きありがとうございます。

更新ペースは一週間に一度を目標としています。

これが処女作なので、至らない点も多くあると思います。
ご意見やご感想、ご指摘などを頂けたら幸いです。

辿り着いた場所で

「かはっ……」

宇宙のただ広い空間を彷徨っていた意識が体に戻るような感覚を覚えて、輝は目を覚ました。

「……っぐ」

途端に頭痛が襲ってきて、頭を押さえようとする。しかし、その手が上手く動かない。まるで他人の体になってしまったかのように、神経が通っていない心地がする。

暫くするとようやく感覚が戻ってきて、輝は身を起こすことに成功した。

「ここは……屋上か？」

目に飛び込んできたのは見慣れたはずの景色だったが、どこか違和感を覚える。——空が、赤い？ 輝は慌てて立ち上がり手すりに駆け寄った。

「何が……どうなってるんだよ……」

絶句した。

異常。一言で表すならばただそれに尽きる。

街が、燃えていた。

街が、壊れていた。

何よりもまず大地震が起きたことを疑ったが、そうではないと即座に理解させられる。——それは一発の銃声。そして吹き飛ぶ屋上の扉。

振り返ることさえできない中、足音が近づいてくる。

「手を上げなさい」

凜とした女性の声。それに輝は背を向けたまま、のろのろと両手を上げた。

「まさか……一般人？ 何でこんな所にいるの？」

「それより俺はここが本当に日本なのかを聞きたいよ……」

「質問をしているのはこっちよ。……ゆっくり振り返って。妙な動きを見せたら容赦しないわ」

「……」

その命令に逆らえるはずもなく、輝は両手を上げたまま後ろを向く。

そして、振り返った先にいたのは

「嘘……」

何故か目を丸くした、一人の少女だった。

——風が強い、と場違いにも輝は思った。ここはいつだってそう
だ。少女の栗色を軽く帯びた髪が揺れる。二つに縛った後ろ髪が横から顔を出す。

「何で……あんたが」

強気そうな瞳に驚愕の色を浮かべながらも、銃口はピタリとこちらを向いている。年は輝と同じくらいだろうが、黒光りする銃は不思議なくらいに彼女に似合っていた。

「おい、できれば状況の説明くらい頼む。このまま死ぬのはあまりに救われん」

輝が声をかけると、少女はハツとした表情を浮かべ銃を握り直した。

「状況って……テロリストの攻撃を受けているのよ。避難命令も出ているでしょ！ 何であんたはこんな所にいるのよ！？ バカなの！？」

「なっ……！」

訳の分らないことをまるで当然の如く言われ、ついに輝の混乱はピークに達した。

「……そんなの初耳だ！ 何だよテロリストの攻撃って！ ってか初対面のヤツに馬鹿呼ばわりされてたまるか！」

「っ！」

一瞬、少女の表情に怒気ではない何かが浮かんたような気がした。しかし、少女は銃を下ろしながら背を向けてしまったため、それが

何かは分からない。

「おい、お前……？」

「お前じゃない。あたしの名前は風流瑞希^{なづるみずき}よ。……ついてきて。あんたをシエルターまで連れて行くわ」

有無を言わせない調子で少女は歩き出す。その後ろ姿からはもう何も読み取れない。

「早く。まだここは危険よ」

どうやら選択肢は一つのようなのだ。

「……久遠輝だ」

輝は覚悟を決め、少女——風流瑞希の背中を追った。

「なあ瑞希」

「……普通いきなり名前呼ぶか」

「いきなりでもないだろ。俺には聞きたいことがある。そして、それは全く解決してない」

「そういう意味じゃない。馴れ馴れしいと言っているのよ」

「……」

そっちか、と輝は言葉を詰まらせた。馴れ馴れしい——いきなり名前で呼び捨てだからだろうと気づく。

輝はマンシヨンの階段を下りながら、目の前を先行する少女の背中を見つめた。

言われてみると確かに、自分は彼女に対して警戒が薄い気がする。銃口突きつけられて、突然妙なことを言われて、しかも軽く拉致されて。割と……というか、かなり理不尽な扱いだ。警戒して当たり前なほどに。

——でも、と輝は思った。二つに分けて縛られたセミロングの髪から華奢な肩が見え隠れする。その背に言葉を返した。

「なんとなく、そっちの方がしっくりきたからだと思う。……不快だったなら謝る、ごめん」

「……別に良いわ。あたしに強制する権利はないし。好きにすれば良い」

「ああ。ありがとう。じゃあ改めて……瑞希、聞きたいことがある」
「何？」

「色々あるが、とりあえず、いつから日本の銃刀法は改正されたんだ？」

まずは手近なところからと思い、瑞希の手に収まっている銃を指差し、輝は尋ねた。

「何よその法律？ そんなの知らない。ってなわけで、あたしはあたしの中の法律に従うわ。銃オツケー」

「フリーダムかつ！……まあ良いや。ひとまずそれは置いておこう。で、俺、エレベーターに乗ってからここ数分の記憶がないんだけど、いつの間に街が火の海になっているのは何でだ？……かなりヤバいだろ」

一体どれだけの被害があるのかなんてのは知らない。それでも、輝にだって安否が心配な人はいる。できるのならば、一刻も早く確かめたい。

「さっきも言ったじゃない？ いやいよお隣の国が牙を向いたのよ。さんざんニュースにもなってたけど」

そうだっただろうか、と疑問に思い輝は記憶を掘り起こそうとするが、そもそもニュースをあまり見ないから分かるはずがなかった。「どうやら本当に知らないようね。その無知さには呆れるしかないわね」

自分の顔にはその様子がありありと浮かんでいたらしい。本当に呆れた調子で嘆息する瑞希に、輝は少しムツとして言い返した。

「じゃあ、何でお前はここにいたんだよ？」

「あたしがシーカーだからに決まっているでしょ。九割はこちらが制圧したけれど、まだ残りの一割は息を潜めているわ。今戦わないでいつ戦うのよ」

シーカー？ また耳慣れない単語だ。自衛隊の部隊の名前か何か

だろうか？

ひとまず、ほとんどこの戦闘が終わりかけている点に輝は安堵した。

「こつちこそあんたがあそこにいた理由を聞きたい。避難放送にも爆撃音にも気づかないなんて……はつきり言つて異常よ」

「……正直、俺にだって良く分からない。バイトの帰りにエレベーターに乗ったところで記憶が途絶えているし。……ただ、気づいたらあそこにいたんだ」

「……怪しい。あんた本当にテロリストの一味じゃないでしょうね？」

瑞希は銃をこちらに向け、誘うように軽く上下に振る。

「違う。それを言うなら、お前だって俺と大して年変わらないのに、そんな物騒なモノを持ってるじゃねえか。怪しい」

銃がピタリと止まり、照準が輝の眉間に定まった。

「あんたと同じくらいの年だからってなめないですよ？ これでも実戦経験は両手で数え切れるくらいにはあるわ」

「と言われても、一から十って地味に範囲広くないか……って、実戦！？」

「そうよ、実際の戦闘。……略し方、合ってるわよね？ ま、別にいつか」

実戦を経験したと言う瑞希に、納得できる部分もあるかもしれないと輝は思った。彼女からは何か常人にはない、底冷えするような雰囲気を感じていたからだ。

「……！」

次に何を尋ねようかと考えていたところで、急に瑞希が足を止め、輝はその小さな背中につつかってしまった。

「急に止ま……っ！」

「馬鹿……！ 大声を出すな！」

顔だけ振り返り小声で怒鳴る瑞希。そこで輝は、何やら良からぬ事態が発生しているのだとようやく気づいた。ゆっくりと柔らかい

背中から身を離し、何やら手元に集中している瑞希を覗き込む。

「電波の妨害が酷い。でも確かにこのマンション内のどこかに誰かがいる……」

ぶつぶつと呟き、瑞希は携帯のような端末をポケットに入れた。

「誰かって……誰だよ？」

「さあ？ 屋上で寝過ごしたわけではないことは確かね」

「ということは？」

瑞希は答えの代わりに銃を撃つようなフリをする。

「ええと、つまり、同じようにこちらの場所を掴み切れない……テロリストさん、とか？」

輝の言葉に瑞希は口の端を微かに上げた。

「寝過ごした割には優秀ね」

「ありがとよ。あと二回も寝過ごした言うな」

一度目はスルーしたのだから。しかも別に寝過ごしたわけじゃない、と輝は心の中でだけ反論する。

「とにかく、位置が判明しない現状ではこちらも迂闊に動けないから、暫くは様子を見るわ。少し黙っていなさい」

「……おい」

「何よ。黙りなさいって言ったでしょ」

「足音がする。数からして多分二人。場所はここから二つ下の階」

「え……」

「お前が誰かいるって言ったんだろ？……耳は良いんだ」

「耳が良いって……そんなレベルじゃない」

明らかに怒りを表した調子の声。全く、清々しいほど感情が素直に表れる人だと思う。

「気持ちとは分かんなくてもないけど、嘘じゃない」

瑞希は輝の真意を探るようにジッと瞳を見つめてきた。こちらも目は逸らさない。

「信じる」

数秒の後、瑞希はそう言うと、輝に先ほどの端末を手渡した。

「これから二手に分かれるわ。あたしがその二人組と接触するから、あんたはここに残ってそいつらの居場所を逐一あたしに連絡して」
そう言つと、瑞希は髪をかき上げイヤホンを自分の耳に差し込んだ。

「待てよ。それなら俺も一緒に……」

「足手まといよ」

「つぐ！」

ストリート、かつ的確な言葉に輝は閉口せざるを得なかった。自分分はヒーローじゃない。頭では理解していても、その事実を素直に受け入れることができるほど輝はまだ大人ではなかった。

「まあ、死ぬわけじゃないんだから気楽に構えていなさい」

言い残し、瑞希は猫のような身のこなしで階段を駆け下りていった。

大嫌いなこと

端末は既に設定されていたらしく、輝はそれを右耳に当てた。同時にもう片方の耳の全神経を研ぎ澄まし下の階に傾ける。

集中。余計な雑音は意識の外へと排除する。こぶになった糸を最速でほどくためにはどの糸を引っ張れば良いのかを見極めるような、繊細かつ集中力を多分に使う作業。

そして、輝の耳が必要な情報を捉える。

「瑞希、聞こえるか？」

「……聞こえるわ」

「二人組は何かを話し合っていて、まだ移動はしていないようだ。あと、このマンションはL字型に建設されている。で、こちらの階段からは遠い方の通路のどこかにいるはず」

「……こちらも確認した。間違いなくテロリストの一味ね。隙を窺って仕掛けるわ」

「ああ。また何か動きがあったら連絡する」

端末から耳を離し、ふと自分の手を見つめた。少し汗ばんでいるけど、こんな状況でも意外と冷静な自分もいる。今はその冷静さが残ることを祈るばかりだ。

『そろそろ仕掛けるわ。ヘタするとこのマンション吹き飛ばから、埋もれないようにだけ気をつけなさい』

「……いつ！？ 埋もれ……って、それ以前の問題だろ！」

物騒な言葉に思わず言い返したが、それはあっさり無視された。

「っ！」

そして響く銃声。

「くっそ！」

恐怖。加えて、少女一人を危険な状況に追いやっていることへの憤り。……物音を捉えすぎる耳に銃声がガンガンと響き、こめかみを押さえた。

「一人っ！」

瑞希の勇ましい声が端末から聞こえてくる。次いで、三つ重なっていた銃声の一つ減った。どうやら一人倒したようだ。

「……っ！ 逃げる気か！」

不意に銃撃戦が止み、足音が遠ざかっていった。

「下か……？」

輝は踊り場から三階に下り、逆側に設置された非常階段に目をやる。

銃を抱えた男が一人、階段を駆け下りていく。そして、それに続いて滑るように階段を下りる瑞希の姿を発見した。

「逸れるわけにはいかないか……」

もう自分にできることはないかもしれない。そんなことは分かっている。しかし、ここで逸れても自衛の手段はないのだ。せめて迷惑にならぬように十分な距離を保ちつつ追いかけるのが最善だろう。

「……自分本意な考えだよなあ」

そこにあるのは自分が助かるための手段だ。そんな自分が嫌になる。

「でも」

そんなことをじっくり考えていられる余裕なんて、あるはずもなかった。

マンションのエントランスに辿り着く。視覚に注ぐ意識を最低限にし、ほぼ全てを聴覚に回して周囲を警戒する。

「うおっ！」

マンション前の道を足音が通り過ぎようとしてることに気づき、輝は集中を解くと咄嗟に柱の陰に隠れた。

「……さっき逃げてた奴か？」

陰から様子をうかがうと、背後を振り返りながら走っていく男が見えた。その視線の先には——瑞希の姿。

「いや……！」

違う！ アイツが見ているのは――瑞希の更に後ろ！

そこには銃を構え、瑞希の背中に狙いを定めるテロリストがいて、そして、それに瑞希は気づいていなくて。

――間に合わない。

そう思った瞬間には、輝の体は既に弾かれたように走り出していた。

「避けるおおおお！」

咆哮。瑞希が目を見開く姿が一瞬瞼に映る。

――間に合わない。

銃声。空気を切り裂き、飛ぶ鉄の塊。

――間に合わない。

「間に合ええええええつ！」

瑞希を突き飛ばし、射線上に割って入る。

――間に合った！

――間に合った？ それは、つまり？

「っ！」

自分が撃たれたということ……？

パツと鮮血が宙に散った。しかし、幸い肩を掠めただけで済んだようだ。物語とかでは度々見かけるシーンだが、実際にはこれだけで死んでしまいそうに痛い。肩を押さえてその場にしゃがみ込む形になった。

「……？」

静寂。追撃がないことに疑問を感じた。これは遊びじゃないのだ。自分はこんな無防備な状況なのに、銃声が止むのはおかしい。

輝は傷から目を離して周りを見渡した。

「……」

何故か瑞希も、逃げていたテロリストも、撃ったテロリストも、目を見開いて自分を見ていた。この空間だけ時間が止まっているようだ。誰も身動きを取らない。

「な、何だ？ これ」

まるで……そう、化け物を見るかのような。そんな感じの、戸惑いと、畏怖が滲み出た視線が輝一人に浴びせられている。

「……………」

「……………」

突如としてテロリストの二人が大声で会話を始めた。異国の言葉だったので、何を言っているのかは分からない。

そして――

「……………」

彼らは何事か叫びながら輝に銃を向けた。それはまるで、完全に目標が切り替えられたような。彼らにとって何か予想外のことが起きたかのような。

輝はそんな目まぐるしい状況の変化に身動き一つ取れなかった。

「ちいっ！」

そんな中、およそ女の子発して良いレベルじゃないほどにイラついた舌打ちをし、瑞希は呆然と立ち尽くしていた輝の手を掴んだ。

「一旦退くわ……」

輝にだけ聞こえるような声で言うと、瑞希は手を高く振り上げ、地面に手のひら大の何かを投げつけた。

強烈な噴射音。そして曇る視界。火災訓練で体験したような臭い。

――それは煙幕だった。

「行くわよ」

ぐいと手を引っ張られ、輝はその誘導に従って走った。どうやら瑞希には見えているらしい。テロリストが何かを叫んでいるようだったが、その声も次第に遠くなっていく。

――そうして輝と瑞希はその場から離脱した。

「って、そんなに簡単に行くわけないか！」

しかし、大通りから路地に入ろうとしたところで、ばったりとテロリストの一味と思われる人物と遭遇してしまった。

「……！」

出会い頭に発砲されたが、輝は瑞希に引っ張られるまま横っ飛びに転がってそれを避けた。近くに止まっていた車の影に潜む。そこでついに輝はその場に座り込んでしまった。

「あんたは、その路地に入って隠れなさい！」

瑞希は輝の耳に口を寄せてそう叫ぶと、銃を取り出し身を乗り出して迎撃を始めた。

銃が火を噴き、火薬の臭いが鼻を刺した。ここは非現実？

「……くそっ！」

情けないことに足が震えて動けなかった。まるでアクション映画の世界にでも入ってしまったかのような錯覚に囚われる。本当にアクション映画ならば良い。だけど、肩の痛みがその錯覚を否定する。言いようのないほどの恐怖。ここは現実。

銃撃戦の合間を縫って瑞希が一瞬だけこちらに目をやった。

「……大丈夫。死なせはしないわ」

たった一目で輝の状況を悟ったのか、彼女は敵を見定めたまま輝を安心させるかのように不敵な笑みを浮かべ言い放った。その横顔に恐怖を払われたような気がした。今なら走れる気がした。——立ち上がる。

「これを」

瑞希が腰のポーチから何かを取り出し、それを素早く輝に手渡した。おそらく先ほどの発煙手榴弾だろう。輝はそれを握りしめるとポケットに入れ、大通りから細い路地へと走り出した。

それに気づいたテロリストがこちらに銃を向けるが、
「行かせるか！」

瑞希の鬼気迫るような連射に阻まれ遮蔽物に身を隠した。

その間に輝はなんとか路地に入り込むことに成功した。

「……っはあ」

そのまま奥へと走ると、壁に手をつき大きく息を吐き出した。その両手が思い出したかのように震え出す。その手をぎこちなく動かし、服の袖を破いて包帯代わりに肩の傷に巻きつけた。

距離が離れたため銃声は微かに聞こえるだけになっている。それほどまでに遠くへ来ていたのか、と輝は思う。

「……」

ふと先ほどのマンションの時を思い出した。まただ……また自分は遠く離れた場所で銃声を耳にしている。

「これで、良いのかよ……」

知らず内に声が漏れていた。

これで、良いのだろうか？ 自分一人だけ安全な場所に隠れて。

怯えて。震えて。何よりも、瑞希一人を危険に晒して。……しかも、その少女は自分を助けようとしてくれているのだ。

自分だけが、遠く離れた場所で待っている。時間が経てば状況が変わるから。

……時間が経てば？ 不意に自分の考えていたことに引つかかるものを感じて思考を止めた。

それは。時間に解決させることは――

「そんなの良いわけねえだろ」

――久遠輝が大嫌いなことだった。

並行世界

輝が考えた作戦は非常に単純なものだった。

テロリストの背後から不意打ちをする。そして、生まれた隙を瑞希につかせる。

これなら瑞希の足手まといにはならない……と思う。あくまで隙を作るのが目的であって、自分が格好良くテロリストを倒すわけではないのだから。

「行くぞ、俺……」

銃撃戦はまだ続いていた。策はある。時間はかかったが、瑞希と撃ち合うテロリストの背後に回り込むことも成功している。あとはこの物陰から出て、テロリストの気をこちらに向けさせるだけだ。

「……」

ふと自分の手を見つめた。もう震えてはいない。——走り出した。

「……っ！」

テロリストよりも先に瑞希がこちらに気づいた。僅かな間視線が交錯する。輝は右手を掲げ、自分が何をするつもりなのかを瑞希に伝えた。

しかしそこで流石と言うべきかテロリストも背後から迫る人の姿に気づき、銃口をこちらに向けた。

「って、気づくの早すぎんだよっ！」

それは輝にとっては完全に予定外だった。もう少し接近するつもりだったのに、こんな段階で発見されては危険度がグッと上がる。

とは言え、見つかったしまったものは仕方ない。輝は先ほど瑞希に手渡された手榴弾をテロリストに向けて投げつけた。

「……っせい！」

テロリストはその動きを目で追い反射的に身構えるが……しかしそれは地面を転がっても輝の狙い通り発煙することはなかった。何も起こらないという、予測できなかった事態にテロリストは対応で

きず、全ての動作を止めてしまった。

——そして、それは瑞希が突撃するには十分すぎるほどの隙だった。

「はあああああ！」

その光景を見届けると、輝は瑞希の射線に入らないように右に進路を変えて走る。

テロリストが慌てて瑞希に銃口を向け直そうとするが、それはあまりに遅かったようだ。

輝が目に戻すと飛び込んできた光景は、地面に伏すテロリストと、悠然と佇む瑞希の姿だった。

「あんた、ホンツとに馬鹿だったわね！」

その後、輝に待っていたのは瑞希の叱責だった。当然とも言っべきだが。

「一度逃げたのにわざわざ戻ってくるし、それにあたしはそんなつもりでアレを渡したわけじゃないのよ！」

「……耳が痛い限りです」

長い間瑞希の説教は続いたが、輝は甘んじてそれを受けた。

「……で、結局何で戻ってきたのよ、あんたは」

最後に投げやりな調子で瑞希が尋ねた。

時間が過ぎるのを待つのが嫌だったからと言うわけにもいかない
ので、輝はもう一つの理由で答えることにする。

「お前が俺を助けようとしてくれたから、俺もお前を助けたかったんだ」

「……そんなことは身の程を知ってから言いなさい。手榴弾のフェイクは悪くはなかったけれど、あんたには百年早いわよ。ヒーローにでもなりたかったの？」

「知るか。ただな、助けられてばかりで何一つ返せないなんてのはゴメンなんだよ」

そう告げると、瑞希は目を丸く見開き、そして笑い出した。しかも、お腹を抱えて。本格的にツボだったような反応をされて、輝は釈然としない気分になる。

「……あんたって、結構意地っ張りよね」

瑞希が顔を上げて言った。

「意地を張って何が悪い。俺は個性を前面に押し出していく性質^{タチ}なんだよ」

「そ。ふふっ」

何が面白いのか瑞希はまだ笑っている。その表情は今まで銃を握って戦っていた人ではなく、あどけない笑顔を浮かべる同年代の少女そのもので、輝は思わず目を奪われた。

「さ、その話はそのくらいにしとこうかしら」

笑い疲れると、瑞希が表情を引き締めたので輝もそれに倣った。

雰囲気が一気に変わる。

「で、あんたハイダーだったの？」

「はい、たー？」

漂白剤？

「ハ・イ・ダー！」

「そのハイダーってのは一体何なんだ？」

「……知らない。ってことは、やっぱり……」

ぶつぶつと呟き、

「あんた、この世界では人を殺せないこと、知っている？」

「は？」

人を殺せない？ 藪から棒に何を言っているんだ、と輝は思う。

「今日は分からないことだらけだけど、そのセリフが一番だよ」

「そんな……本当に知らないの？ 冗談じゃなくて」

顔が密着しそうなほど思いつきり詰め寄られる。その瞳は真剣だったため、輝は改めて姿勢を正した。

「知らない。ついでに、さっきお前が言ってたハイダーってのも何だか分からない」

「……そう」

とだけ言い、瑞希は俯いてしまった。その表情は前髪に隠れて見えない。

そして数秒後に顔を上げた瑞希からは、やはりもう何も読み取れなかった。

「手短に話すわ。あんたにとっては理解できないことだらけだろうとは思うけど……聞いて」

「あ、ああ」

「まず、この世界はあんたの知っている世界じゃないわ。良く似ているだろうけどね」

「待て。その段階で既に俺の頭はついていけない」

「黙って。時間はそんなにないの」

「……分かったから銃を突きつけるな」

「よろしい。で、簡潔に言ってみれば、あんたは、こことは違う並行世界——パラレルワールドの方が分かりやすいかしら——から“跳んで”来た人間なの」

パラレルワールドから？ 跳んだ？

「あんたの住んでいた世界……現界げんかいって言うんだけど、そっちでは人殺しがあれば戦争もあるでしょう？」

「……そりゃあ、あるな」

「この世界、鏡界きょうかい——ああ、鏡の世界って書いて鏡界ね——では、それらが一切ないわ。」

鏡界では、人を傷つける行為は神に認められていないのよ」

「神？ 認められていない？ ……いや、思いっきり銃撃戦してただろ、お前ら」

「してたわよ、催眠効果のあるガスを散布する弾でね」

「……は？」

「別にこれは殺傷することを目的としてないのよ。さっきのヤツも、死んでなんかいないどころか掠り傷一つ付いていないわ」

瑞希に促され、先ほどのテロリストが倒れている地点に移動した。

「確かに外傷は見当たらないな……ってか、こんな所で警戒を怠ってても良いのか？」

「一度銃撃戦があった所、しかも仲間が倒れている所なんて何の罠があるか分かったもんじゃないから、その心配は要らないわよ。誰も来ないわ。」

「それじゃ、一度見せた方が良いと思うからちよつとだけ下がって」「あ、ああ」

指示された通りに数歩テロリストから距離を空ける。

それを見届けると瑞希はどこからかナイフを取り出し、それを投擲した。

そのナイフは倒れたテロリストに突き刺さる――

「えっ！」

――ことはなく、その五十センチほど手前の空間で、まるで見えない壁に当たったかのように動きを止め地面に落ちた。

「なんだ……今の……」

輝が呆然と声を上げる。今のナイフは手品かと疑ってしまつくらいに不自然な動きをした。

「次、銃でいくわね。これの弾は催眠ガスが入っているから――メートル圏内の人間は強制的に眠らされるわ」

瑞希が今度は銃を取り出し、何の躊躇いもなく引き金を引いた。

「また……」

銃弾は速すぎて見えなかったが、またしてもテロリストの手前の空間でその勢いを殺され地面に落ちた。

「分かった？ 今の現象が、“キャンセル”と呼ばれるもので、この世界の住民には誰もがそのチカラを持っているの。……誰にも傷つけないチカラをね」

「……そして、そのキャンセルとやらがあるから、人殺しができない」

「そう。そんなわけで、銃弾を肩に喰らったあんたは現界から来た人間だってバレたの。キャンセルが発動しないことが証拠となつて

ね。……本来なら殺傷を目的としていない銃弾だったのから、大した傷にはならなかったのが唯一の救いね。銃弾の勢いが止まった瞬間に催眠ガスが散布される設計になってたのもラッキーだったわ」「ラッキーと言われても……」

ちよつと、何と云うかまだ頭が整理できていない。

要は鏡界には怪我とか人殺しがない。それはキャンセルがあるから。でも、輝は現界から跳んできたからそんなチカラは持っていない。つまり怪我をした「現界の人間。俺死ななかった」「ラッキー。」

——と輝なりに要点をまとめた。

「よし、なんとか整理できてきたかも」

少しずつこの世界の仕組みが理解できてきたような気がする。

名前と名前

「そう。まあ細かな定義は置いておくとして、あんたの住んでいた世界——現界と、今いる世界——鏡界の大きな違いはキャンセルの有無ね。最終的な因果とかはどちらも共通しているわ」

「……因果と言われても何のことかさっぱり」

「運命とかそういうものよ。つまり、現界で生きている人間は鏡界でも生きている。現界で死んだ人間は鏡界でも死ぬ。」

例えばAと言う同一人物は二つの世界で同じ因果を持った人生を送っているの。Aは現界と鏡界に同じ年に生まれ、二十八で同じ相手と結婚し、三十で子供を持ち、八十で死ぬ——みたいな感じにね」

「そう。現界と鏡界は表裏一体の世界なの。その人間関係や、文化のレベルまでね。共通点は非常に多いわ」

「じゃあ、さつき並行世界と言ったけど、どうして俺は別の並行世界に跳んでしまったんだ？」

「……その理由はまだ明らかになっていないわ。ただ、あんたみたいに現界から鏡界に跳んで来た人間をここではハイダーと呼ぶの。」

ハイダーは元々こちらの世界の人間ではないから、さつきも言った通りキャンセルは発動しないわ。体は鏡界にあるのに現界のルールに従わなければならない」

「俺はこの世界では異分子だということだよ……。しかもさつきの奴らの驚きっぷりからして、かなりレアなケースだったり？」

「ご名答」

「ご名答ですか……」

並行世界とか、既に自分という存在がある別の世界に跳ぶなんて、どんなファンタジーとかSFの物語だよ、と輝は思う。

「待てよ。じゃあ、元々こちらの世界にいた久遠輝はどうなっているんだ？ 鏡界にも久遠輝はいたんだろ？」

「……言いにくいけど、鏡界で生きていた久遠輝は“消えた”はずよ。鏡界の久遠輝はあんた一人しかないわ」

「消えた？ 俺と世界を交換して現界に行ったとか？」

「それは可能性としてはあるかもしれないわね。確かめた人はいないけど」

「……そうか」

本当に理解し難い話ばかりだ。頭が痛くなってくる。

「さて、今話すべきなのはこれくらいかしら。そもそも説明なんて後でも良かった気がするけど」

「……」

そうなんだよな、と内心で同意する。今もまだ完全に安心できる状況ではない。

「つてか、何で俺、テロリストに狙われたんだ？」

「ハイダーには利用価値があるから、捕獲したいんでしょう」

「利用価値？」

「そ。色々ね。さあ、そろそろ移動するわよ。……これを着て」
「ん？」

あからさまに話題を逸らされたような気もするが、ともあれ輝は瑞希から受け取った上着に手を通した。

「血なんか見せたら自分からハイダーですって公言しているようなものだからね。この世界でハイダーは異端の存在よ。狙われるのは何もテロリストだけじゃない」

「……げ。見つかったら研究施設で実験のためになんちゃらとかはマジでないよな？」

「……」

瑞希は肩を竦めた。答えになっていない。

「ま、自分の命のためにも、今後は怪我なんてしないことね。あと、誰にも自分がハイダーであることを明かしちゃダメよ」

「……誰にも？」

「そ。女の子と二人きりの秘密があるなんて嬉しいでしょ？」

意地悪く笑う瑞希だが、輝はそれよりもむしろ、瑞希がどうやら自分のことを秘密にしてくれるみたいであることの方が気になった。「それは時と場合によるな。……まあ、瑞希が秘密にしてくれるってのはありがたいけどさ」

「なっ！」

途端に瑞希の意地悪そうな笑みが引つ込み、顔に赤みが差した。

「ん？ もしかして今、秘密にするって自分が言ったことに気づいたのか」

なんだろう。並行世界について丁寧に説明をした上、自分のことを秘密にしてくれるあたり、瑞希はかなり良いヤツなんじゃないかな、と輝は思う。

「知らない！ それより、それを着たのならそろそろシエルターに行くわよ！ この街を襲ったテロの残党はほとんど捕えられているはずだし、最初にあたし達を襲ったヤツの所にも仲間が向かったでしょうからね」

「あ、ああ。ところで、ふと思ったんだけど、人殺しができないのに何でこんな……街を破壊するようなテロが行われているんだ？」
勢いよく歩き出した瑞希に従いながら、話題を変えたそうな彼女に助け舟を出してやる。

「……あいつらの目的はこの国に経済的なダメージを与えることよ。血を流させられないから、金を流させるの」

「それはまた……何と言うか嫌々世界だなあ、ここ。折角人殺しできないんだから、平和に暮らせば良いのに」

「どんな世界であつても、憎むことがヒトの本性なんじゃないの」

「さざりと言うなよ」

的を射ているとは思っけどさ、と輝は少し笑った。

瑞希の指示に従って移動をし、幸い誰からも見つかることもなくシエルターとやらのある場所に到着した。

シエルターは学園の下にあるらしい。名は景悠学園。偶然にも、和奏の通う地元の学園だ。……和奏もここにいるのだろうか。

「何してるのよ？ 早くしなさい」

「あ、ああ」

促され、思わず止めてしまっていた足を動かす。

「ここにシエルターがあるなんて、初耳だな……」

「そりゃそうでしょう。これは鏡界にしかないからね」

「……さっきから気になっていたんだけど、お前さ、やたら現界について詳しくないか？ こっちの人はみんなそうなのか？」

「それは……まあ人によるかもしれないけど、あんた達の世界の存在に関しては誰もが知ってるわ。現界の人間は鏡界のことを知らないこともね」

「なるほど。確かに俺らの世界では鏡界の存在は知らないな」

「さ、着いたわ。ここに来る途中でも言ったけど、あたしが話を通すからあんたは何も喋らないで」

「分かった」

そこは学園の中庭の中央に立っている大きな木の前だった。大きいと言うよりも、太いと言った方が良さかもしれない。直径で四メートルはある木だ。高さもそれなりにはあるが、とにかく太いことが目につく。ここにシエルターがあるというのが瑞希の話だったが……輝は正直まだ半信半疑だった。

瑞希はその木の前に立ち、おもむろに木の幹に空いていた小さな穴に指を突っ込んだ。

『——指紋認証をクリアしました。市民番号8003589風流瑞希。所属、シーカー』

機械的な声が聞こえたかと思うと、次の瞬間、木の幹が分かれ、人が四人は並んで通れそうな大きさの扉が現れた。

「ほ、本当にあった……」

思わず驚きの声が小さく漏れてしまった。……不覚にもカッコいいと思ってしまったのは仕方ない。

『……お〜う、瑞希か？ どうしたん？ 一応作戦行動中なんだけどな』

次に扉のモニターフォンから聞こえたのは機械の音声ではなく、やたらと軽薄な感じの男性の声だった。

「……承知しています。作戦行動中に逃げ遅れた一般人を保護しましたので避難をさせに来ました」

『なるほどね。こっちの通信が途絶えていたから心配したぞ』

「申し訳ありません。端末を失ってしまいました」

『まっ、無事だったのなら良いけどね。作戦はほぼ完了したし。』

じゃ、瑞希は中田班と合流して残りの掃討に加わって。その男の子はこちらで保護するよ』

「了解しました」

『……ひよっとして』

「はい？」

『その男の子に手えつけてたんじゃないだろうね？』

「ぶっ殺すぞ、クソ兄貴！」

『お〜う、怖い怖い。じゃあね〜』

からからと笑う声を残したまま通信が切れると、瑞希は憎しみを込めて扉を蹴った。

決して意図したわけではないだろうが、それに驚いたかのように扉が開いた。

「えーと、今のは……お兄さんですか？」

「……」

無言でキツと睨まれ、輝は口を閉ざした。怖い怖い。そうだよ、怖いよ。こうなるって分かっていただろうに。あの人絶対確信犯だろ、と輝は思う。

「中に入ったら適当に生きてなさい。怪しまれたら記憶喪失ってことにでもすれば良い。」

もう一回言うけど、自分がハイダーであることは絶対に誰にも言わないことね。じゃ」

「あ、おい」

「……何？」

さっさと踵を返してしまふ瑞希を輝は呼び止める。

「まだ礼を言ってない。……色々ありがとう」

本当はいくら感謝しても、し足りないくらいだ。今はせめてもの思いを込めて頭を下げる。

「……」

暫く瑞希の言葉がなかったので、輝はゆっくりと頭を上げてみた。瑞希は服を握り締め、口を開いて何か言うべきか悩んでいるようだった。

そして――

「輝！ 死ねる体持つてるからって、簡単に死ぬんじゃないわよ！」

――そう言い残し、手をひらひらと面倒くさそうに振ると、少女は戦場に駆けていった。

「“輝” って……お前だって馴れ馴れしいじゃんか」

でも、その呼び方が対等に扱ってくれた証のように思えて、不思議と悪い心地はしなかった。

「第1話 鏡界 完」

風の音が聞こえる

街の復興は驚くべきスピードで進んでいた。ものの三日で燃えたビルなどの瓦礫は取り除かれ、既に建物の修理が始まっている。そして街に住んでいた人々は「やれやれ、またかよ」みたいな感じで、さして気にすることもなく普段の生活に戻っていった。

——あれから一週間が過ぎた。

輝が戦争のないパラレルワールド……鏡界に跳んできて、一週間。似たようでも違う世界、というものがどれだけ厄介かを思い知らされるには十分な期間だった。

例えば、細かいところなら、戦争や暴力事件などのニュースが全く無かったり。……まあこれはそこまで厄介ではないけれど、自分の常識が通用しない点は多くあった。

例えば、隣の部屋に住む人とマンションで偶然会った時にこちらから挨拶をしたら、その人に「おいマジかよ！ 今日雪なのか！ ？ 畜生！」とでも言いたそうな顔でドン引きされたり。

——例えば、輝が学園に通っていたり。

「……恨むぞ、この世界の久遠輝……」

現界ではフリーターだった輝は、鏡界では学園生だった。

あれから一週間が過ぎ、そして輝は今まさに学園に向かっている。

「恨むのなら現界のあんたを恨みなさい。自分自身を、ね」

輝の隣を歩く瑞希が、一も二もなくそう言った。彼女とのこういった会話にも慣れつつある。

瑞希も輝と同じ学園の制服を着ていて、彼女も学園生であることを示していた。

「大体、あんたくらいの年で進学しなかった人なんてそんなにいないでしょ？ 何であんたは進学しなかったのよ」

「そりゃあそうだけど……色々事情があつたんだよ」
慣れない制服の袖を掴み、ため息を吐く。

——繰り返すが、あれから一週間が過ぎた。

あのテロの翌日に収束宣言が出され、輝を含めた民間人は帰宅を許されたため、ようやく自宅に帰った輝をマンションの前で待っていたのは、あの少女——凧流瑞希だった。

そして瑞希は宣言した。

「これからあんたを毎日監視するわ」

それは、迷惑極まりない宣言だった。少なくともその時は。

ところが、瑞希を家に上げ、物凄く回りくどい話（この世界に來たばかりのハイダーは放っておくと危険とか、あんたがハイダーってバレたら自分にも迷惑がかかるとか）を聞いていく内に、どうやら彼女はこの世界に不慣れな輝が迂闊なことをして正体がバレるのを防ぐための善意から言っていることが伝わり、輝はありがたく彼女の言うところの“監視”を受けることにしたのだ。

「お前ってさ、やつぱ良いヤツだよな」

と言ったら速攻で殴られたあたり、やはり瑞希は誰かに褒められるのに弱いんだと輝は思っている。

それから数日が経ち、監視と言う名の教育により輝はようやくこの世界で何とか生活できるほどの知識を身に付けることができた。

……とは言え、鏡界の久遠輝は学園生だということを瑞希から告げられた時には流石に絶望した。就学したら負けだと思っていたから……ではなく、ただ単に中卒でバイト漬けの自分は学園がどんなところかさっぱり分らないからだ。

本当のことを言えば、家に制服がある時点でこりゃあヤバイと思っていたが、鏡界の久遠輝にコスプレの趣味があるんだと自分に言い聞かせていたため、自分が学園生だと知った時のショックは余計に大きかった。

「あんた、明日学園行くわよ。あたしもそこに通っているから途中までは一緒に行くけど、細かいフオローなんてできないからくれぐれも気をつけなさい」

と、瑞希が輝の儂い希望を打ち砕いたのが昨日。

必死に登校拒否の意思を示したのだが、今朝わざわざ迎え（家のチャイムを連打し）に来てくれやがった瑞希を追い返すことができず、輝は何年かぶりに制服なるものに腕を通すことになったのだ。

そして、今に至るといいうわけだ。

「ため息なんか吐いたって現実是不変わらないわ。これから生きていくには、鏡界の久遠輝の人間関係とか生活を知らなきゃダメでしょ？」

「正論です。……しっかしなあ」

「しかし、なあに？」

その猫撫で声怖えよ……なんて言ったら自分の命が危ないから言わないけれど。

「いやさ、俺はこの世界——鏡界で学園に通ったりして生きていかなきゃいけないんだなあ、って思ってたな。……なんつーか、実感が湧かないんだよ。いきなり並行世界に跳ばされてさ、ここで今日から暮らせて言われたって」

そんな輝に、瑞希は口調を改め聞いてきた。

「現界に戻りたい？」

「うーん。そら、まだ判断できないな」

「……」

「なんか、意外そうな顔してるな？」

「……まともな神経がある人なら帰りたいって思うわ」

「毒のある言い方があるがとう」

「で？ どうしてまだ判断できないの？」

「何かさ、この世界に俺が来たのは意味があるんじゃないかなーっ

て思うんだ。もしかしたら」

「……何、そのどこかで聞いたようなセリフ」

「いやいや、実際こうでも考えなきゃどんな世界でも生きてけねえよ。世の中、意味なんてないものが大半だろ？ 毎日学校行つてさ、会社で働いてたりさ……何の為に生きてるんだかたまーに分からなくなる時つてあんじゃん。」

だから、意味を探すんだよ。その可能性がある限り、どんなにくだらないことでも投げ出さない……ってか飽きないようにか？ 俺はそうしたいと思っている」

「……つまり、そうやって自分を騙すと？」

「有り体に言えばそうだな。自分を騙して、励まして、生きる」

「ふーん。何か……前向きなのか、後ろ向きなのかビミョーね」

「前向きだよ。俺は後ろを向くのも、時間に解決させるのも嫌いなんだ。」

もちろん、戻る方法があるなら探したいけど、今はまだこの世界を知りたいと思ってるのもホント」

「じゃ、学園が楽しみね」

「……今、忘れかけてたわ。学園はやっぱなあ……行きたくないんだよ……」

自分で言つといてアレだけど、数学とか英語の授業の意味探しながら意味あんの？

と、がつくりとする輝を置いて瑞希は先に行ってしまう。二、三歩進むと立ち止まり、こちらを振り返った。スカートがふわりと翻り、一瞬瑞希の健康そうな太ももが露わになる。

「ほら、意味を探しに行くんじゃないの？ 早くしなさいよ、輝」
そう言つて歩き出す瑞希の姿は、どこことなく嬉しそうで、笑っているようだ。それを眺める輝は、瑞希がまた新しい表情を見せたことを微かに意識する。

数日一緒に過ごしたけれど、この少女は表情がころころ変わるのを見ていて飽きないというのが輝の心境だ。

「学園ねえ。そう言えば……和奏もあそに通っているんだっけか」
「ごたごたしてたから、鏡界では一度も会ってない。顔を見て安心したいところだ。」

ぐんぐん先を行ってしまふ瑞希の背を見つめ、最後にもう一度だけため息を吐く。それはもう、学園に行くことが億劫だから出るため息ではない。

「行きますか」

眩きを五月の風に寄せ、輝は歩き出した。

借り物の日常

「つてな感じで、学園に到着したわけだが……」

「何よ？」

「まず俺の上履きはどこだ」

「……あ」

輝は校舎内に入る段階で早速問題に直面していた。当たり前と言えは当たり前だが、出席番号はもちろんのことクラスさえも分らないのだ。百単位である箱の中から自分の上履きを探すのは到底不可能だ。

「そつだ。学生証」

瑞希が思いついて言う。確かに学園生であることを示すそれがあれば、そこには輝の出席番号は載っているだろう。

しかし――

「……家に置いてきた」

「バツカじゃないの！」

瑞希の罵倒に輝は身を縮こまらせた。

「アレだよ。ほら、普段あまり使わないクレジットカードを持ち歩くのって危ないだろ？ その感覚で……な？」

「同意を求めるな！ んなのあるわけないでしょ！ 身分証持たないなんて、逮捕されたらどうすんのよ！？」

「お。財布にTカードが入ってたぞ」

「今、あたしはあんたがキャンセルを使えないことを神に感謝したくなつたわ……」

瑞希が物騒なことを言う。その足が振り上げられそうになったため、咄嗟に輝が鞆でガードしようと身構える。

と、その時――

「朝っぱらから何をしているのですか、久遠」

――とても冷静な声が言い争う二人の背後から聞こえ、二人はそ

のままの姿勢で動きを止めた。

そちらに目をやると見慣れた少女の姿が長い髪をたなびかせながら立っていた。鏡界に来てからも輝が気にかけていた数少ない友人の一人、華秋和奏だ。

「おお、和奏か。おはよう」

「おはようございます。……それで、あなた方は道を塞いでいるという自覚はあるのですか？」

和奏に冷ややかに言われ辺りを見渡す。下駄箱の通路で言い争いをしていた二人は、登校してきた学園生の邪魔にしかなくなっていなかった。

慌てて道を譲り、二人は改めて和奏と対面した。

「そちらの方は？」

「……風流瑞希よ。初めまして、華秋さん」

和奏に尋ねられ、それに瑞希が一步前に出てやや突っかかるような態度で自己紹介した。

「私をご存知なのですか。失礼ですが、同じクラスの方でしたか？」

「うっん、そういうわけじゃないけどね」

「そうでしたか。……まあどちらとも良いです。改めまして、華秋和奏です」

鞆の前に抱え、和奏が頭を下げる。彼女は無愛想に見えると言われがちだが、礼儀はとても正しく決して不機嫌なわけではない。

「では、先に教室に行かせていただきますね。失礼します」

「あ、待って！」

やるべきことは済んだと言わんばかりに教室に向かおうとする和奏を、不意に何かを思いついたらしい瑞希が呼び止めた。

「あなたって、こいつと同じクラスじゃなかったっけ？」

言いながら輝を親指で指差す瑞希。

「……そうですが、それがどうしましたか？」

「ちょうど良かったわ。久遠君はこの前のテロの時に一部の記憶を失ってしまったみたいで、学園についてのことをほとんど覚えてい

ないのよ」

「……そうなのですか、久遠？」

驚いても良い場面だったが、和奏の表情は相変わらずその色をと
たえることもなく、ただ少し心配するような目で輝を見る。

隣の瑞希を見ると彼女は意味ありげに目配せをしていて、輝はその
意図を悟る。要は、同じクラスの彼女にも色々フォローしてもら
えということだろう。

「実はそうなんだ。あ、和奏のことは覚えてるんだけどな」

「でね」

と瑞希がまくし立てるように言う。

「彼は自分が記憶喪失であることをあまり人に知られたくないそう
なのよ。周りの人に心配をかけたくなくてね」

「はあ」

「そこで、華秋さんには久遠君の手助けをして欲しいのよ」

和奏は訝しげに瑞希を見つめていたが、やがて同意を示すように
頷いた。

「分かりました。その記憶喪失と言うのがどの程度なのかは分かり
ませんが、できる限り久遠の手助けをしましょう」

「そ、ありがとう」

「……あなたに礼を言われるようなことはありません」

ぶっきらぼうな言い方ではあったが、瑞希は特に気にした様子も
見せず

「それじゃ、あとよろしくね」

と言ってさっさと先に行ってしまった。

「ええと、俺が礼を言うべきだよな。ありがとう、和奏」

「どういたしまして、です。では私達も行きましょう。下駄箱の位
置は分かりますか？」

「……いや、分からない」

「そうですか。こちらです。確かあなたの番号は……」

全く面倒そうな態度も見せず、それが当たり前であるかのように

下駄箱を上から下へと眺める和奏を見て、輝はもう一度心の中で和奏に感謝した。瑞希といい和奏といい、自分の周りには親切な人ばかりで本当に恵まれていたと、そう思う。

和奏のフォローや、午前中は学園の再開に関するお知らせなどで授業がなかったのが幸いして、輝は何とか午前中を乗り切ることができた。

そして昼休み。

「おお、感動した。これが購買のパンの味が」

輝は和奏と一緒に中庭で昼食を摂っていた。初めて食べる購買のパンに輝が感動していると、同じく購買で買ったサンドイッチを手にした和奏が言った。

「この学園は無駄に広いので学食だけでなく、こうして購買で買った物を中庭で食べる人も多いみたいです」

「へえ」

確かに広い中庭には、例のシェルターが隠されている大きな木を囲むように何人かの男女がグループを作って昼食を摂っていた。ベンチもいくつか設置されていて、輝と和奏が今腰かけているのもそこだ。

「本当に学園については何も知らないのですね」

「ああ、そうみたいだな」

和奏の言葉に頷いた。記憶喪失ということになっているとは言え、その嘘を和奏に通すのはまだ抵抗がある。

「これから授業が始まりますが、大丈夫ですか？」

「それがネック。いやむしろそれだけがネック」

「何をしに学園に来ているのだからなくなる台詞ですね。……」

まあ、気楽にやれば良いんじゃないでしょうか。これまでのあなたも成績が良かったわけじゃないですし」

「お、マジか。安心した」

ありがとう鏡界の久遠輝、お前も馬鹿だったんだな。さっきの恨み言はどこへやら、輝は自分が過度な期待のされている学園生でなかったことに感謝した。

「……………」

「……………」

説明することも尽き、そもそも食事中に喋ることなどないからか、二人の間の会話は途切れた。現界でも良くあることだったので、輝もさして気にせず惣菜パンを胃に収める。

ふとサンドイッチを少しずつ食べる和奏の様子を横目で見た。淡々とした調子ながらもアルバイトに遅刻した自分を起こしに来てくれたり、今もこうして輝の手助けをしてくれる和奏。交わされるのは必要最低限とも言える会話。

—— 現界の和奏と鏡界の和奏の間に性格の差などはほとんど感じられない、というのが輝の正直な感想だ。それは、うっかりするとここが鏡界だということすら忘れてしまいそうなほどに。

瑞希の話を聞く限りでは、鏡界と現界の同一人物でも性格が一致しないことや人間関係が異なることは良くあるらしい。輝のように進路が異なることも然り、だ。その点、和奏に現界と鏡界のギャップを感じないのは輝にとって歓迎すべきことだろう。

……ただ、この和奏との関係は鏡界の久遠輝からの借り物であり、自分が築いたものではない。そのことをそう簡単には割り切れないのもまた事実だった。

いちごミルク味

昼食を摂り終え、輝の教室である二年七組に戻るとそこには死体があった。

「いつからここは死体置き場になったんだ……」

……詳しく説明するなら、教室の後ろに設置されているロッカーの上に小柄な男が仰向けになっていた。と言うかロッカーの上で情眼を貪っていた。自分の机、百歩譲っても床で寝るのが常識であるが、男は堂々とロッカーの上を占拠している。教材を取りに来たクラスの間も、男に気づくと驚きの表情を浮かべた後、その睡眠を妨げるのが恐ろしいのか何もできずにすごすこと帰っていった。

何とかした方がよいよね？ でも無理だよ、アイツ絶対起きないもん。と、クラスからひそひそと話し声が聞こえるが、男は全く目を覚ます様子もなく死体であり続けている。

「……」

そして残念なことにその男は久遠輝の友人だった。

「和奏。こいつって俺の知り合いだっけ？」

「ええ。更に言うならば、このクラスで彼と会話するのはあなただけです」

「そうか」

現界と同じような関係だということに肩を落としながら、輝は男をどうにかするべく近くに寄って行った。

「こいつも学園生だったのか……」

幸せそうな寝顔を浮かべて眠る彼の名はしいな椎名健。現界では輝と同じく中卒のフリーターであり、訳あって多くの時間を共にしてきた男だ。鏡界の健が学園生になっていたのは意外だった。

「起きろシートケ。こんな所で寝てんじゃねえよ。クラスの皆さんに迷惑だろうが」

懐かしいあだ名を呼び、健の耳を引っ張った。人を傷つける意思

のない行動にキャンセルは適応されないと教えられていたので、このような多少のお仕置きはセーフだ。

「うにゅあ」

妙なうめき声を上げながら、健の目が開いていく。

「なんだ、輝か……くう」

が、途中で閉じた。

「寝るのかよっ」

「……眠いんだよう。二度寝くらいさせてよう」

「まだ一度も起きてないだろ」

「じゃあ一度寝する」

「聞き覚えのない単語を作るな」

「……………」

「よし、二度寝なら許可してやるから一度起きろ」

「……起きる」

「よし、偉い子だ」

健はごしごしと目を擦りながら身を起こすと、細い腕を後ろに回し寝癖のついた髪を掻いた。瞼はトロンとしていて気を抜いたら今にも眠ってしまいそうだ。童顔のため、その姿は実年齢よりもずっと幼く見える。

一度起きたから寝る、とか言わせる前に輝はポケットを探り、その中に思っていたものがあることを確認すると、

「むぐっ……………」

健の口に飴玉を突っ込んだ。

「はあああ。甘〜い」

途端にほんわかとした笑顔を浮かべ飴玉を頬張る健を見て、輝は彼の目を覚ますミッションに成功したことを確信した。

「っは！ またいつもの手段に引っかけた！」

気づいた時にはもう遅い。健の意識は完全に覚醒し、飴玉を味わうためにフル稼働していた。

「ぐぐぐぐぐ。いちごミルク味とは卑怯な……ウマイから怒れない

じゃんか」

「はいはい。良いからそこをどけよ、シータケ。大体何でロッカーの上で寝てんだよ」

「ロッカーは金属だからひんやりして気持ち良いんだよ!」

「誇らしげに言われても……」

ぴよんと素直にロッカーから飛び降りる健を見、輝は手を目に当てて嘆息した。きっと鏡界でも自分は彼の保護者的役割だったのだろう。このポケットの飴玉がそう告げていた。

ふと視線を感じて健を見ると、彼の二つの眼差しがジツとこちらの目を見つめていた。

「んゝ輝、何か雰囲気変わった?」

「……気のせいだろ。五月だしな」

「そっかゝ。五月だしねゝ」

こう見えて健は鋭い部分がある。悟られるのも時間の問題かもしれないという予感がした。

「そう言えば午前中は姿を見かけなかったが、どうしたんだ?」

「んゝ、寝てたよ。今来たばっか」

来て早々寝てたということになるが、輝はそれを指摘する気にはならなかった。

「あ、昼休み残り五分あるね。良いや、机で二度寝しよ」

健は輝の言葉も待たずに自分の席へと歩き去っていった。途中で女子に何か話しかけられていたようだったが、耳を貸す素振りも見せずに席に座る。そして、尚も何かを言い募る女子を無視したまま小さくなった飴を砕いて胃に収めると、何事もなかったかのように眠りの世界へと旅立った。女子は信じられないといった感じで肩を怒らせながら去って行った。

椎名健は非常にマイペースな男なのだ。

「……相変わらず、万人受けするキャラなのに他人に興味がないヤツだな」

その姿は、輝の知っているシータケこと椎名健そのものだった。

健は基本的に自分の興味のある対象としか会話をしようとしなく、かく言う輝も出会った当初は健の華麗なるスルーを経験した人だ。「もう一人、クールで他人に興味のないヤツもいるけどな」

「それは私のことでしょうか」

「決まってるだろ……って和奏、お前いつからそこにいた？」

横を見ると、てっきり自分の席に戻ったものだと思っていた和奏の姿があった。

「ずっといましたよ。……どうやら私も彼の興味の対象ではないのですね」

「どうだろ？ 和奏とシータケなら結構反りが合うと思うけどな」

「そうですね。まあ、こちらからどうしようとする意志はないので別に良いのですが」

言葉を聞くと冷めた反応だったが、彼女の言う「まあ」ですが「は必ずしも本心でないと輝は知っているので、もしかしたら脈があるかもしれないと思った。」

放課後になると、死体が二体が増えていた。片方は言わずもがな、健。

そしてもう片方は、

「全っ然分からなかった……」

輝だ。机にへばりついたまま怨嗟を零している。

「何なんだ、この授業は。いつから数学は英単語を使うようになったんだよ……」

要するに授業に全く付いていけず、心が折れそうになったわけだ。午後にあったのは数学と英語と物理。一年と一か月のハンディキヤップを埋められるはずもなく、輝は教科書の内容を何も理解することができなかった。

仮にテストがあったとしたら輝は記号問題しか答えられないだろう。しかし、その日は近いだろう。赤点を取って留年したくはない。

「勉強しないとヤバいな……」

一年の内容から復習したいところだが、一年の時の教科書は全て処分してしまったらしい。

「仕方ない」

帰りがけに本屋に寄って参考書でも買うことにしよう、と輝は決めた。

「さっきから何をぶつぶつと言っているのよ？」

顔を机から引っぺがして腕に乗せ視線を上げると、鞆を腰の前に抱えた瑞希が輝の前にいた。

「何でもない。……何か用か？」

「用も何も授業終わったのよ。帰るに決まってるでしょう」

「部活は？」

「帰宅部。ほら早く立ちなさいよ」

「あいよ」

瑞希が手を引っ張り、顔が腕から落ちそうになったため、仕方なく身を起こす。

「和奏は……帰ったのか」

教室を見渡しても、談笑する生徒や爆睡するシータケしかない。和奏はもう帰宅したのだろう。

「ん？」

何故か教室にいた何人かの生徒と目が合った。目が合うとすぐに逸らされ仲間内でのお喋りに戻っていったが、自分のことを噂されているようで良い気分はしなかった。集中すれば聞き取ることではできるだろうが盗み聞きはしたくないので、気にしないことにして帰り支度を手早く済ませ瑞希と共に教室を出た。

その時の輝は、視線が自分だけではなく瑞希にも向けられていたことに気づくことはなかった。瑞希もまた自分への視線など気にしないので同様に意識することなく、二人の去った教室には飛び交う噂話だけが残った。その騒ぎ声で目を覚ました健が不機嫌そうに教室から出て行ったことは、とんだとばっちりだっただろう。

千円ちよっどの買い物

瑞希とナチュラルと一緒に登下校をすることになったが、輝にはわざわざ口に出して指摘する気はさらさらなかった。そもそも彼はオープンな性格であるという自負があったし、この数日で瑞希の性格も掴めてきた。……言ったら多分銃を突きつけられる。

そこで輝はこの時間を鏡界についての質問タイムにあてることにした。自転車がなかったため徒歩通学だったが、こうして話ができるという点ではこちらで良かったと思う。

「結局お前の言ってたシーカーってのは何なんだ？」

「ああ、シーカーってのは国際的な軍隊みたいなものよ。まあ、正確には組織そのものじゃなくて組織に属する人のことを言うけれど、組織の名前がないから結構ごっちゃになってるわ。

いくら戦争がないと言っても、ああいったテロとかはある。その対処がシーカーの役目よ。あたしもその一人ってわけ」

「……まだこんなに若いのか？」

「審査に年は関係ないのよ、シーカーってのは。意志さえあれば何歳でも加入することができる。いつからそうなったのかは知らないけど」

「へえ」

瑞希が言うからにはそれが常識なのだろう。不意に頭をよぎったが、彼女が何を思っただけでシーカーになったのかは軽々しく聞いてはいけない気がしたのでやめておこう。

「良い輝、覚えておきなさい」

「ん、何を？」

「絶対にあたし以外のシーカーには目をつけられちゃダメよ」

「……それは何でまた？」

「それは……」

続く言葉を待っている時だった。

「危なああああ！ そのカップルどいてくださああああ！」

微妙に勘違いの混じった悲鳴を上げながら、一台の自転車が猛スピードで輝と瑞希に向かって突撃してきた。

「うおっ！」

間一髪のところでは輝と瑞希がそれを避ける。自転車が二人の間を通過していった。

「申し訳ないっす！」

数メートル先でブレーキをかけ続けていた自転車がようやく止まったらしく、持ち主はその場で両手を合わせて頭を下げてきた。通り過ぎた時にちらりと見えた姿からして学園生だろう。スカートがめくれまくっていたような気もするが、一瞬だったので分からない。その学園生は相当急いでいたらしく、再び自転車にまたがると先ほどよりは少しだけ遅いスピードで残りの坂を下って行った

「……今の俺ってピンチだったよな？」

「あたしもよ」

乱れた髪とスカートを直しながら瑞希が呆れた調子で言った。

「今みたいなケースではキャンセルは発動しないわ。キャンセルの発動条件は“故意に人を傷つけようとした時”だから、事故や自分の不注意での怪我は起こり得るの。……もちろん、それが原因で死ぬ人がいないわけじゃない」

「そうなのか……てつきり何でも身を守ってくれる万能なものだと思っていた」

「その辺まだ詳しく説明してなかったわね。でも大事なことから覚えておいて。あたしたちは不死じゃないの。絶対に人を殺めてはいけないわ」

「おう？ そりゃあそうだな」

瑞希の言い方に何か引っかかるものを感じたが、言っていること自体は何も間違っていなかった。輝は神妙に頷いた。

瑞希と別れを告げた後、輝は一人本屋に向かった。

参考書や問題集よりも一年の教科書を買った方が良いのかと悩んだが、教科書は明日にでも誰かに借りることにして、参考書を買うと決めた。

さてレジに向かうかというところで、輝よりは十歳は年下の少女が本棚の上の方にある本を取ろうと必死に背伸びしている光景が目に入った。運悪く店員は近くにいないようだ。

「どれが欲しいんだ？」

輝が声をかけると少女はビクツとして後ずさった。輝はしゃがむと視線の高さを合わせて、身を縮こまらせる少女にできるだけ優しく聞いた。少女の片手には全財産であろう千円札が握られている。

「あれ……」

やがて少女がおずおずと指差したので、輝は立ち上がり本棚に目を向ける。

「うーん、これか？」

「ちがう、となり」

「どっち側？ お箸を持つ方、それともお碗を持つ方？」

少女は自分の手を見つめ、宙でその動作をすると右手を掲げた。

「おちゃわん持つ方！」

「左利きだったか……ほら、取れた」

少女が選んだ本はハードカバーの小説を手渡す。

「そんなの読むのか？」

「……………」

少女は首をぶんぶん横に振った。

「プレゼント……おかーさんに」

「そうか。これからも親は大切にするんだぞ？」

「……うん。おにーさん、ありがと」

はにかみながらそう言っていると、少女はレジの方に走っていった。

「さて、俺もさっさと買って帰るかな……」

レジに向かうと、少女がちょうど会計をしているところだった。その後ろに並ぶ。

「いらっしやいませー。えーと、千三百円になります」

やる気があるんだかないんだか分からない声色の女性店員が、バーコードを読み取ったその瞬間、輝は、あれ、と思った。少女はレジの上で手のひらを広げて代金を払っているようだ。しかし、確か少女が握っていたのは千円札一枚だった。それでは足りない。

「ちょうどお預かりします。ありがとうございましたー」

プレゼント用だと聞いてしまったからには不足分を払ってやろうと思い輝は前に出かけたが、会計は何事もなく終わり少女は嬉しそうな足取りで去って行った。

「お次の方ー、ってどうかしましたか？」

「いや、別に……」

やたらとトップの毛があちこちに跳ね、襟足が長い髪型の女性店員と目が合う。

ひょっとしたらあの少女は小銭は別に持っていたのかもしれない、と思ったが、その予想は裏切られた。

店員がレジに入れようとしているそれはどう見ても千円札一枚だったのだ。

「……今の会計、足りなかったんじゃないのか？」

「あ、バレましたか」

舌を出して笑う女性店員。化粧はしていないが顔立ちのはっきりとしていて、輝とそう年は変わらないように見えた。

「いや、自分のミスっすよ。仕方ないんですこっす」

その女性店員はとぼけた調子で言いながら自分の財布を取り出すと、きつちり三百円をレジに入れた。……とんだ茶番だ。もちろん良い意味でだが。

「さー、お待たせしました。どうぞー……って、あれ久遠先輩じゃないっすか」

「？」

「すみません。気づかなくて。ども、度々申し訳ないっす」

鏡界の輝の知り合いだったのだろうか。どう対処すべきか咄嗟に浮かばない。

「あ、自分、さっきの坂の、ほら」

「ああ！ 暴走チャリの！」

「そうです。それです。初めまして、萩原はぎわら深有みゆです」

どうやら知り合いではなかったらしい、と輝はホッとしながらも言葉をかけた。

「学園生だよな？」

「ぴっちぴちの一年っすよ、久遠先輩」

「ええと、萩原って言ったか？」

「あ、深有で良いっすよ。“みう”じゃなくて“みゆ”なんで、そこんとこだけ注意してください」

「そうか。で、深有。何で俺の名前知ってんだ？」

「あー、気になってたんすよ、先輩のこと」

「……は？」

「あ、決して恋してるとかストーカーとかじゃなくてっすね」

深有はぶんぶんと手を横に振った。

「久遠先輩と言えば、あのお美しくてクールな華秋先輩や、童顔で人に興味ゼロの椎名先輩と唯一コミュニケーションを取れる存在として一年の間では有名なんすよ」

「何だそれ……和奏とシータケと話せるだけで有名人扱いなのか、俺？」

「いやいや、ご謙遜を。久遠先輩だって……っとすみません。後ろにお客さん並んじやいましたね。会計しちゃいます」

流石にレジで働いている人といつまでも話してるわけにはいかない。輝は本を渡すと手早く会計を済ませ、深有から釣り銭とレシートを受け取った。

「また機会があったら話しかけても良いっすか？」

「ああ。何か俺結構お前のこと気に入ったし、いつでも声かけてくれ」

「お、久遠先輩から自分への好感度が上がりましたね。嬉しいです。では、また」

深有の快活そうな笑顔に見送られ、輝はその場を後にする。

「持つてるんすかね、久遠先輩は……特別な何かを」

その眩きはあまりに小さかったため、集中をしていない輝の耳に届くことはなかった。

「第2話 久遠輝であるために 完」

千円ちよつどの買い物（後書き）

第2話終了です。

ここ最近もう一作を書き始めたので少し更新ペースが落ちると思いますが、なるべく一週間に一度の更新は守りたいと思います。
気の長い話ですが、よろしければお付き合いください。

やまない雨

輝が学園に通うことになって二日目の朝。今日は瑞希が何か用事があるようなので、一人での登校になった。

「眠い」

今日の授業の予習をしようと思ったが、予習ができる前提条件すら理解できないまま足掻いた結果、眠りについたのは午前四時近くになってしまった。しかも内容はほとんど理解できなかったという結果。……流石に徹夜する気力はなかった。

中途半端な眠気と戦いながら通学路と歩いていると、長い襟足にツンツンの髪の毛の学園生に出会った。昨日の本屋の店員、萩村深有だ。向こうもこちらに気づいたようで、軽く会釈しながら近づいてきた。

「あれ、久遠先輩じゃないですか。どもです。……って、どしたんですか？ 随分と眠そうすけど」

「深有か。おはよう。いや、昨日買った本を読みふけてたせいで寝不足なんだ」

「なるほど……確か買われたのは参考書でしたよね？ 勉強すか？」

「そんなところ」

欠伸を噛み殺しながら答える輝に、深有が感嘆の息を吐いた。

「は、二年生ともなると大変なんすね。自分らはまだ入学して一か月なんで、ちょっと今後が心配になってきました」

「うん、まあ……基礎は大事だと思うぞ」

俺が言えた義理ではないが、と輝は心の中で付け足す。

「肝に命じとくつすよ。ところで先輩、ちよろつとお聞きしたいことがあるんすけど」

「ん？ 何だ？」

「先輩って、椎名先輩とか華秋先輩とどうやって仲良くなったんす

か？」

「ああ。一年でそんなことが噂になってるんだっけ」

輝は昨日聞いた話を思い返ししながら、どことなく固い表情を浮かべる深有を見た。

「そつす。別に広めるつもりはないんですけど、やっぱ気になるんで、もしよろしければ教えて欲しいっす」

「……うーん」

話すこと自体は構わないが、鏡界と現界の出会いや親しくなる過程が異なる可能性もあるため、口にすることが憚られた。

「ダメっすかね……？」

横を歩く深有が輝を覗き込むように見ていた。

「……三百円分だけな」

「はい？」

「何でもない。良いよ、話す。って言ってもそんなに大した話じゃないんだけどな」

「ホントですか、ありがとうございます」

不安げな表情から一転して、弾けるように笑顔が浮かぶ。

「まず、出会いが早いのは椎名健……シータケだな」

飴を舐めながら幸せそうな顔をする健を思い出しながら言う。

「五年生の時だったかな、ヤツが俺の通っていた学校に転校してきた。シータケは誰の話も真面目に聞かないし、授業中も抜け出すようなヤツだった。……いや、今でもそうか。とにかくシータケは最初こそ気に留められていたが、そんなヤツだから次第に誰も声をかけなくなった。

まあ、俺は最初から話しかけようとしなかったが、ふとしたきっかけがあってアイツと話すようになったんだ」

「ほうほう、昔からそんな感じだったんですね。で、きっかけって何か？」

「飴」

「はい？」

「だから、飴」

「あのお空から降り注ぐ天然のシャワー……」

「酸っぱい方の飴じゃなくて、甘い方の飴」

「酸性雨とかけたんすか……面白いですね」

「なら笑えよ」

「……自分、不器用なんで」

「何で急に人と接するのが苦手な相撲取りっぽくなってるんだよ」

「で、きっかけが飴ってどういうことですか？」

「急に話を戻すなよ。……まあ、飴って言うか、キュービィ。アップだったな。……あ、キュービィ。アップって分かるか？」

「ええと、小さい立方体の飴っすよね。小包装に二種類のフルーツ味の飴が入った」

「そうだ。あれは遠足の日だったな。当然のごとくあぶれたシートケは偶然俺らの班に入ることになったんだ。で、当日。どこに行っただかとかは忘れたが……昼食の時だった。シートケはキュービィ。アップをおやつに持ってきていた。それは良い。だがな、アイツは信じられない食べ方をしたんだ」

「……と言いますと？」

「一粒ずつ食べたんだよ。信じられるか？」

「はあ……はい？」

深有は頷きかけて、首を傾げた。

「だから、二粒入りのキュービィ。アップをいっぺんに口に入れず一粒ずつ舐めやがったんだ」

「それで……？」

深有はとりあえず頷いて先を促すことしかできない。

「ムカついたから喧嘩を吹っかけた」

「大人気なっ！」

「そら子どもだからな」

「ってか、小さいっすよ先輩、器が」

「あの頃はやんちゃだったんだよ」

「……それで、どうなったんすか？ お前なかなかやるな。お前こそ。って感じすか？」

「いや、喧嘩が終わった後、俺はキュービィ。ツプを二粒舐めることによって生まれるシンフォニーの素晴らしさをヤツに説明したんだ。初めは半信半疑だったシータケも試しに二粒舐めてみた。……ヤツはシンフォニーの虜になった」

「最早意味が分からないっす……」

「アイツは言った。僕は今まで一袋に同じ味が二粒入ったものを楽しみにしていた。でも、今知った。アレは邪道だと。あつてはならない存在だと。」

そして、俺らは友達……いや、同志になった」

「前後がまるで繋がらないっす、先輩。ってか同志で。キュービィ。ツプから生まれる同志で……」

「シータケとはそれ以来の仲だ。シータケは飴好きだったから俺はたまにアイツに飴をやったら、知らない内に何か懐かれてた」

「完全に餌付けしてますね、先輩。すげえっす」

「たまにキュービィ。ツプって二つくつついてるのあるよな。あんな感じで、俺らも仲良くなったんだよ」

「今日一番の意味不明な発言いただきました。……って言うか、まさか、華秋さんの場合もそんな感じなんすか？」

「んー、和奏は氷で俺が手って感じだな。乾いた手で触ったら剥がれなくなるんだけど、水で濡らせばあっさり剥がれる関係。」

そもそも、和奏と出会ったのは……」

「どうかしましたか？」

「あ、いや。そっちは秘密にしとくわ」

「そんなご無体な……」

「ま、きつかけなんて大したものじゃなくてもさ、あの二人だって人間なんだ。そりゃあ、親しい相手がいてもおかしくないだろ」

「そうですかねえ。先輩が特別だからな気がしますけど……」

「人間関係に特別も何もねえよ。そういうのは、遠慮せずに一歩踏

み出せばいくらでも広がるもんだって」

「……それも、また才能ってね」

輝の耳にも微かに聞こえるくらい小さな声で、深有は呟いた。

「？ 何か言ったか？」

「いえ、何でもありません。ってか、先輩めちゃくちゃ耳良くないっすか？」

「……やっぱ何か言ったんじゃないか」

「おっと、失言でしたね。なに、先輩を素直にお褒めするのが恥ずかしいだけっす」

「……良く分からないけど、ありがとう、と言っておけば良いのか？」

のらりくらりとやり過ごす深有に、輝は少しだけ首を捻りながら通学路を歩いた。

その後、輝が瑞希とも話す姿を深有に見られ、再びその出会いを問われるのはまた別の話だ。

アンサンブル

景悠学園には、学年共通の選択授業というものがある。

書道。美術。音楽。家庭科。茶道。選択肢はそれなりにある。学園生はの中から一つ選び、クラス混合で授業を受ける決まりになっていた。

一番人気なのは、家庭科。次いで、物珍しさからか茶道。

そして、一番不人気なのは音楽だった。

この授業が不人気な理由は、参加した生徒は自作の曲を作ってそれを演奏しなければ、赤点扱いになってしまうためだ。

当然、そのような難しい講義を選択する生徒は、吹奏楽部に入っていたり、小さいころにピアノを習っていたりする人がほとんどで、他は…… よつぽどの物好きだ。

そんなよつぽどの物好きが、この教室には割と多くいたりする。

椎名健、華秋和奏、風流瑞希、そして久遠輝。人の目を引くような雰囲気を持ち主であり、孤高な存在。明らかに“浮いている”四人の姿がそこにはあった。

「今日から本格的に楽曲制作に入っていただきます」

異様な空気の漂う教室で、教師が前に立ち授業の説明をしていた。「一人一曲でなくても構いません。もちろん、一人でも良いですが、誰かが曲の軸となる物を作り、何人かで各パートのアレンジして合奏することも認めます。一人でやるか何人かでやるかは基本的に自由です。とにかくこの授業では最終的にその演奏の得意によって成績を評価しますので、それだけは覚えて取り組んでください。」

ピアノは話し合いで時間を区切って使用するように。それでは作

業を始めてください」

その言葉に生徒は三々五々に作業を始める。とはいっても作曲にそこまで自信がない人、一人で演奏して発表することが恥ずかしい人、というのが大半だ。多くの人が何人かで班を作り、合奏形態の曲を作るうとしているようだった。

「さて、どうするよ？」

出遅れたけど、と輝は隣の和奏に話を振った。

「どうもこうも、あまりこういうのは得意ではありません。やれと言われれば、できないこともあります……風流さんは？」

「あたしも作曲とかはできないわね……と言うか、こんなことをしなきゃいけないって知っていたら、間違いなくこの授業は選択してなかったわ。椎名は？」

瑞希が健に尋ねた。彼にしては珍しく、和奏や瑞希を特別無視することは無いようで、その問いにも素直に答える。

「ん〜、僕は楽器ならできるけど、曲を作るのはちよつとな〜」

「なるほど。期限はいつまでだっけ？」

「一か月後が発表です。この授業は週に二回ですから、今日も含めてあと十回ですね」

「決して長くはないわね」

どうやら一人一曲とか言っている場合ではないかもしれない。このままでは全員落第だ。

「ま、あたしは適当になんとかするわ」

「私もそうさせていただきます」

「僕も〜」

「……………」

輝は思わず頭を抱えた。この三人には協調性というものはないのだろうか。普通そこは「じゃあ、一緒にやらない？」「うん、良いよ〜」の流れだろう。

「……………まあ良いか」

幸い、輝は作曲の経験がある。困ることはないだろう。

この三人がどうするのかも気になるが、無理に干渉するべきではない。輝はそういった距離の保ち方は心得ていた。

「ちよつと、そこどいてくれる？」

不意に席の後ろからハスキーな声が聞こえて、四人は振り返った。そこにはウッドベースがあつた。最近のウッドベースは人語を話す……わけではない。人の大きさ近くあるウッドベースの陰に隠れて、誰か運び手がいるのだろう。

四人は席を立ちあがり、机と椅子をどかした。

「悪いわね。手伝うわ」

瑞希がそう言い、ウッドベースに手をかける。

「……ありがとう」

横に回り込み、二人で運ぶ。

「ここで良いわよ」

指示された場所でウッドベースを下ろすと、反対側から女子生徒が現れ、礼を言った。

「風流さんだっけ？　もしかしてあの人達と一緒にやるの？」

「いえ、別にそういうわけでは」

移動させた机の上に座っている三人を見、瑞希は首を横に振った。「そうなの？　自覚ないかもしれないけれど、あなた達ってこのクラスで浮いてるわよ」

正面切つて言われるとは思わず、瑞希は肩を竦めるだけに留めた。「椎名なんていつもボーっとしてるし、華秋さんは……何でもできそうだけど、妙に人を見下すような態度だし、久遠は何か暴力的だし……」

ねえ、風流さん、良かったら私達の班に入らない？　私達、ジャズの曲をやるうと思ってるんだけど、今三人しかいないからパートがどうしても足りなくて……あなたなら入れてあげても良いかなって」

入れてあげる、ときたものだ。どっちが人を見下しているのだからと瑞希は内心鼻で笑い飛ばしたくなる。

和奏とは数日前、健とはこの授業で、どちらも輝を通して知り合ったばかりなので強くは言い返せないが、こんな風に陰口を叩かれて黙ってられるほど瑞希は優しくはなかった。……というか、正直に言うとお腹立たしかった。

「お誘いは嬉しいけれど、あたしやつぱりあの三人と一緒にやるから。ごめんなさいね」

「……え、でも、さっきは……」

「ええ、そうよ。だって、たった今決めたんだから」

「で、でもっ、あんな人達となんかより私達の方が……大体、彼らがロクな曲が作れるわけがないじゃないっ」

まさか断られるとは思っていなかったらしく、明らかな動揺を浮かべ女子生徒が食い下がってきた。

「曲の良し悪しなんて作ってみなければ分からないわ」

「ふざけないで、私達は吹奏楽部なのよっ」

「だから何？ 彼らよりも実績がある？ それとどこかの大会で賞でも取った？……ああ、吹奏楽部が出るコンクールとかって出場者全員が銅賞を貰えるんだっけ？」

「あなた……っ！」

「言わせてもらえば……大きなお世話よ。他人の評価なんて馬鹿らしい。あたしは、あたしのやりたいようにやる。望まないお仲間ごっこに頭下げて入れてもらうなんてのは、こっちから願ひ下げ」

顔を赤くする女子生徒にそう言い捨て、瑞希は踵を返した。

「ぜ、絶対に後悔させてやる！ そこまで言ったからには覚悟しなさいよ！ 格の違いを見せてあげるわ！」

背後から何かが聞こえてくるが、その声はもう瑞希の意識に入ってなかった。

思考を巡らせながら瑞希は三人の下へ向かう。問題は、あの一癖も二癖もある連中をいかにして説得し、四人で曲を作るかということにあるのだから。

「良いんじゃないか？ もともと俺も四人でやれば、と思っていたし」

「私は別に構いません」

「僕もどつちでも大丈夫だよ」

瑞希の予想に反し、三人は合同での曲作りにあっさりと賛成をした。

「本当に、良いの？」

「良いつての。それよりパート決めるか」

「僕はドラム！」

輝の言葉に、健が真っ先に反応した。それに和奏が続く。

「私はピアノなら少しだけ」

「あたしは……」

と、そこで瑞希は言葉を詰まらせた。実を言うと、瑞希は楽器の類を演奏することは得意ではないのだ。小学校の頃に鍵盤ハーモニカやリコーダーを授業で多少齧った程度で、五線譜も読めなければリズム感があるわけでもない。

「特に希望がないのなら、ベースを頼んでも良いか？」

そんな瑞希の様子を察してか、輝が提案した。

「……弦楽器なんて触ったこともないわよ」

「それでも良いさ。一か月もあればそこそこは弾けるようになる。分からないことがあったら教えるし」

「それなら……分かったわ」

むしろこの場合はスタート地点がゼロの楽器の方が良い、と輝は考えたのかもしれない。瑞希は甘んじてその情けを受けることにした。

「で、輝。あんたは何をやるの？」

「編成的にギターかな。あと、曲作りは俺に任せてくれないか？」

「あんたが……できるの？」

「ああ、まあ一応。全員のパートの土台になる楽譜を次回までに作

って来るよ。ダメそうだったら、また考え直せば良いし」

「……じゃあ、お願いするわ」

「和奏とシートケもそれで良いか？」

「異論はないです」

「うん。良いよ」

和奏も健も賛成し、方向性があつさりと決まる。

あまりにも話が都合良く進み、瑞希は肩透かしを食らった気分になる。

しかし、やる気だけは削がれていなかった。——きっかけはどうあれ、一度やると決めたからには全力で。それが瑞希のモットーだった。

闘志は燃える。

静かに。しかし、強く。

空は気まぐれ

一週間後の音楽の授業、宣言通り輝は楽譜を作ってきていた。「楽器がなかったからデモ音源も何もなくて悪いんだけど」と、前置きをして輝はギターを弾き始める。

「――」

演奏を終え、小さく息を吐く。

「……これって、何かのパクリとかじゃないわよね？」

瑞希が戸惑いがちに言った。

「まさか。作曲、久遠輝だ」

肩を竦めてそう言い、輝は各パートの注意点を健と和奏に説明した。

それを終えると今度は瑞希に向き直る。

「瑞希は楽器買ったんだっけ？」

「ええ、まあ一応」

「じゃあ、俺が教えるよ。二人は個人で練習できるよな？」

和奏と健は頷くと、時折手や足を動かしながら楽譜を食い入るように見つめ始める。楽器に触る前に曲のイメージを掴む作業だ。

輝はさして気にも留めず、二人から離れた場所に移動した。

「どうした？ 瑞希？」

促され、瑞希はベースの入ったケースを抱えながら輝のもとに向かう。

「あんだ、本当に音楽の経験あったのね」

「向こうでそれなりにな。鏡界の久遠輝はそうでもなかったみたいで、家に楽器の一つもなかったけど。」

ま、そんなわけでちょっとズルかもしれないけど、これは向こうで作った曲」

「ふーん。何、曲なんて作って、プロでも目指していたの？」

「いや、目指していたって言うか、プロだった」

「はい？」

瑞希はあやうくベースを取り落しそうになった。

「プロだった、ってあんた……」

「そこそこ売れてたんだぜ？ この不況の中でもCD出せばとりあえず生活に困らない金を稼げるくらいには」

「……確かに、素人が作る曲にしてはあまりに“整いすぎている”

上に、ギターもやたら上手だと思っただけど……本業だったとは。：

…何か、あんたには驚かされてばかりだわ」

瑞希が額に手を当て、首を振った。顔を上げる。

「もしかして進学しなかったのって、それが理由？」

「ああ、そうそう。鏡界に来て勉強面でこんなに苦労するはめになるなら、向こうでも行つとけば良かったな」

「忙しかったらそんなことも言ってられないでしょ」

「まあ、そうなんだけど。そのプロって言うか、音楽で飯を食っていた時代ってのは学園で言うならば一年の時だけなんだ。実際、二年生になる頃にはただのフリーターだったから」

「じゃあ、音楽はやめたってこと？」

「ああ、色々あってな。そう言えば、シータケも当時は俺と一緒にバンドを組んでいたんだ。小さい体のくせにパワフルに、そしてリ正確なリズムで演奏をするドラマーだった。つまり、あいつも現界ではプロのミュージシャンってことだな」

「……椎名とあんたにそんな繋がりがあったのね。って言うか、そんな連中と一緒にやるからにはあたしも下手な演奏できないじゃないかい」

「ま、あくまで現界での話だからあまり気にしなくても良いさ。時間はあるし、できるだけルート音だけで演奏できるようにしといたから、大丈夫だろ。さ、練習するか」

ムスツとした調子で言う瑞希を窺め、輝は授業時間一杯まで瑞希

にベースの基礎を叩き込んだ。

「そんなことがあったんすか……」

放課後、瑞希に教則本を買って渡そうと思っていた輝は、バイトに向かう深有と偶然出会い本屋までの道を共にしていた。その際に近況を聞かれたので音楽の授業について軽く事情を話したところ、その反応だった。

「華秋先輩に椎名先輩、風流先輩に久遠先輩とは……また豪華なメンバーが揃いましたねえ」

「豪華ってほどでもないと思うが……」

「こう言っちゃなんですが、よく纏まっていますよね……揉めたりしないんすか？」

「いや、とりあえず今は、班のメンバーをあらかじめ指定されているグループワークみたいな感じだからな。みんな必要以上には干渉せず自分勝手にやってるさ」

「纏まっては、いないんですね」

「無理に気を遣うよりは数倍居心地が良いだろ」

「なるほど、それは分かるような気がします。知らない人ばかりの班で、上辺だけの態度で付き合うのも疲れますし。逆に無駄に知り合いばかりいて、班の中でまた区切りを作ってその仲間内だけ馴れ合うのも何か違いますしね」

「グループワーク、ってのも考え物だよな。将来役に立つんだかなんだか知らないけど、好きなようにやらしてもらいたいって俺は思う」

「自分はまあ、色んな人の性格とか、この人はこう考えているんだなつてのを知る機会と思って割り切ってますがね」

「確かにそれが一番かな。ま、それはさて置き、暫くは個人練習だ。今くらいの纏まり具合でちょうど良いさ」

「そうですね。頑張ってください。陰ながら応援してます」

「ああ。……ん、あれは……」

とその時、視界に見知った人影が映り、輝は足を止めた。

「シータケ……あいつ何してやがるんだ……」

健が道端で座り込み地面を見つめていた。端から見ると、不審者の一歩手前だ。

輝は健の傍に寄り、声をかける。

「シータケ、おい何やってるんだ？」

「……………」

「おーい、シータケ」

「……反応しないっすね。って言うか何を見ているんでしょうか？」
付いてきた深有が健の目線の先を覗き込んで、そう言った。

「放っておいても良いんだけど、雨が降りそうだし注意しとくか」
健の性格からして雨が降ったくらいでは観察を止めないだろう。
そう思い、輝はポケットを探った。

「お、ついに出ましたね、最終兵器」

「……飴玉が兵器になった戦争を逆に見てみたいとすら思う」

「はい？ 戦争なんてあるわけないじゃないですか」

「……そう言えばそうだった」

危ないところだった。うっかりしているとここが戦争のない世界だということを忘れてしまいそうだ。

輝は飴玉を取り出し、半開きになっていた健の口に放り込んだ。

「……はうあ！」

素っ頓狂な声を上げて、健の体がピクリと小さく跳ねた。

「輝じゃん。いきなりどうしたの？ ううん、それはどうでも良いや。この味な〜に？」

「期間限定、さくらんぼ味だ」

「ちよつと酸っぱいかも〜」

「でも好きだろ？」

「うん〜。今はこんな気分」

「で、何してたんだ？」

「ん、アリを見てた」

「そうか。俺も日頃からアリはなかなかデキるヤツだと思っているぞ。何せ、俺よりもよっぽど働いている。」

まあ、熱中するのは良いけど、雨が降りそうだからキリの良いところで帰れよ」

「分かつら。ほうする」

飴を舐めながら舌足らずな調子で、健が言った。

輝もそれ以上何かを言う気はないらしく、それきり別れそうな空気になった時、

「あの。椎名先輩」

「ん？」

再びアリに目を向けようとした健に、深有が声をかけていた。

「初めまして。自分、萩原深有って言います」

「ふん。そ」

健は深有の瞳をまじまじと見つめた後、興味なさげに顔を逸らしアリへと視線を戻した。

「あの……」

「……」

「あのー、椎名先輩？」

「深有、やめとけ。残念ながら、シータケとお前は合わないみたいだ」

「……でもっ。できればお話をしたいといいますが、ええとですね……！」

淡泊な性格だと思っていた深有が、何故だか今回はやや混乱気味に食い下がる。その熱意に押され、輝は仲介を試みることにした。

「あー、シータケ」

「何？」

輝の言葉にはしっかりと反応する健に、深有が何とも言えない表情を浮かべた。

「自己紹介した相手にはなるべく返事をした方が良いと思うぞ」

「ん、その子に興味ないし、別にどうでも良い」

「……すまん、やっぱ無理かも」

輝の言葉に、深有が体を乗り出す。

「どこが、どこがいけないんですか、椎名先輩？ 自分が久遠先輩みたいじゃないからですか？ 言ってくれば自分は……」

「うーん、その子、人の調子を窺っているみたいで嫌い」

「……っ！」

初対面の相手に容赦のない言葉。その上、あくまで輝を介しての会話。つまり、健には深有を相手にする気がさらさらないということだ。

「はい、そこまでだ。シータケはアリの観察に戻ってくれ。深有はもう行くぞ。バイトがあるんだろ」

「ん」

「……そうでした」

両者が答える。輝と深有はその場を後にした。

「……何か、お恥ずかしいところをお見せしてすみません」

「気にするな。俺は気にしてない」

そう答えながらも、深有は人の調子を窺っている、という健の言葉が結構的を射ているかもしれないと輝はぼんやりと考えていた。

あなたが望めばその距離は

彼女は齒噛みしていた。

音楽の授業の際、風流瑞希が自分の誘いを断ったことで、彼女の仲間内での立場は悪くなっていた。一緒に音を合わせているからこそ伝わる同情、憐み、そして侮蔑。

——クソッ！……あいつら、手のひら返したように私を見下しやがって……！

本当はこんなはずじゃなかった。クラスで浮いている連中から比較的まともそうな風流瑞希をメンバーにすることによって、自分はそんな人を仲間に入れるほど度量が広い、ということアピールするはずだったのに。

結果として、風流瑞希はその提案を足蹴にし、あるうことか他の浮いている連中と一緒に演奏すると宣言した。そしてその宣言通り、人を相手にしないことで有名な椎名健、氷のような冷たさを持つ美少女の華秋和奏、そして言わずと知れたあの久遠輝とともに曲の制作を始めた。

それだけなら。それだけならまだ良かったのだ。しかし、問題は彼らのその後の行動にあった。

まず、ベースの風流瑞希を除いたメンバーの演奏のスキルが異常と言って良いほどに高いことだ。ドラムの椎名健、ピアノの華秋和奏、ギターの久遠輝——彼らの紡ぎ出す音は、雑多な音が絡み合う音楽室の中で一際輝いている。

そして、何よりも、彼らの作っているらしい曲が、人の心を掴んで引き離さなかったことは彼女にとっての誤算だった。流れるような旋律の嵐。荒れ狂う風のように強く、だが、時には春の風のように穏やかに。

まだ個人が演奏しているだけにも関わらず、その曲は何の文句も入らないほどに“完成”していた。吹奏楽部の部員として音楽に携

わっているからこそ分かる、その曲の完成度。——自分達との格の違い。

正直、学生レベルじゃないとすら思った。彼女はインターネットを駆使して、彼らの曲が何かのコピーでないかを調べに調べたが、結果は一つもフレーズが合うものすら見つからないという、彼らの曲の素晴らしさを逆に証明してしまうものだった。

その結果は、彼女の所属する集団の面子を潰すには十分すぎるほどだった。そして、彼女の仲間内での地位を下げるには。

彼女は齒噛みする。

——このまま終わらせてやるものか。

発表までの期間が残り半分になっていた。

「あと二週間になったし、そろそろ合わせようよ」

一人でドラムを叩くのが退屈になったらしい健の提案により、今日の授業では初めて全員での合同練習をすることになった。

短い期間であったが、輝の指導と瑞希自身の努力を怠らない姿勢により、瑞希の演奏もそれなりのものには仕上がっている。

ピアノの使用時間が回ってきて、全員が位置についた。

輝は和奏、健、瑞希を順に眺め、深く息を吐いた。

——いよいよ、合わせるのか。

心なしか、教室中の視線がこちらに向いている気がする。その視線が懐かしいような……疎ましいような。そんなことを思いながらピックを振り上げる。

それはバラードではなく。

しかし、胎児の鼓動のように穏やかに。

それはロックでもなく。

しかし、燃えるような衝動と共に。

インストウルメンタルなら、できる。

ギターを弾きながら、輝はそう思った。歌うことは……心の底から湧き上がる感情を喉から吐き出すことは、もうできないけれど。あの高みに上ることはできないけれど。――楽器だけなら弾ける。

曲が終わる。世界が元に戻るような心地と共に、輝はもう一度息を吐いた。

「久遠、感想は？」

和奏が尋ねる。

「……全っ然合ってなかったなあ」

「その割には、笑いが止まらないようですが」

輝は思わず笑っていた。和奏が怪訝そうな目で、しかし、どこか優しげに輝を見る。

「やっぱり、まだまだだね。あたしが足を引っ張ってるわ……」

「うーん、まあ面白かったし、良いんじゃない？」

健がほくほく顔で言うが、瑞希は再びベースを触り、先ほどの反省をしているようだった。

そうして四人の第一回の合同練習は終わった。

「今まで以上に練習しないといけないわね」

その後、そう言った瑞希に

「じゃあ、放課後も練習するか？」

と輝が申し出て、それに和奏も加わり、三人は放課後に練習することになった。ちなみに健は気分が乗らないからと言って悪びれもせずにそれを断った。

そういうことがあり、三人は放課後に音楽室に向かったのだが、その場所は既に吹奏楽部が所狭しと使っていて、練習することはできなかった。

「それなら私の家でやりますか？」

和奏の提案はこの場で最善なものだった。和奏の家には電子ピアノがあるらしいし、ベースもアンプを通して音量を調節できる楽器だ。周りの住民に騒音の苦情を言われる心配はない。

そういうわけで、三人は輝と同じマンション内にある和奏の家へと向かうことになった。

和奏の家に着くと、早速準備を始める。

「アンプは音楽室のミニアンプを借りてきたわ」

ミニアンプは電池駆動で手のひらに載るほどの大きさのアンプだ。有名なブランドのLEMON製だから小さくても音質は良い。

瑞希はベースのチューニングをし、和奏は電子ピアノのスイッチを入れて音量を絞った。輝はギターを持っていなかったが、流石にこれは音楽室の物を借りるというわけにはいけないので今日は指導役に徹するつもりだった。

「準備ができたなら早速合わせてみるか」

「え、もう？」

「ああ。この曲はあまり運指が激しくないからウォーミングアップにちょうど良いんだ。ただ、テンポをちょっと落とすから俺の手拍子に合わせてやってみて」

「なるほどね……分かったわ」

「了解しました」

二人が頷くのを確認した輝のカウントと共に練習が始まったのだった。

「ドラムがないと自分のミスが目立つわね……」

「どうしても誤魔化せないからな。シータケのドラムは正確だから、もし本番で遅れたら遠慮なく置いてかれるだろうな。ちよつと楽譜がアレだったかなあ」

「ここは八分ではなく、四分音符にしたらどうでしょうか？」

「……ううん」

瑞希が否定を口にした。

「八分で大丈夫よ。モタらないようにするわ」

「そうだな…サイドギターはいないから、俺もここは八分でしつかりと刻んでもらいたい。」

和奏も、ここはそのままが良いか？」

「ええ、久遠が良いのなら。私もその意見には賛成ですし」

「……この楽譜は完璧よ。あたしの技術が追い付いていないだけ」
瑞希は悔しげに言うが、輝は言うほど瑞希の技術が足りないとは思っていないかった。最初はベースのTAB譜を四線譜とか言っていた人が、ものの二週間で一曲を形にするのは十分すぎるほど凄いことだった。しかし、それで満足しないのが風流瑞希という人だ。そしてそんな努力家な姿に、輝は尊敬すら抱いていた。

かつて音楽の道を目指しそして途中で挫折した自分にはないものを、彼女は持っている。

——だからだろうか？

彼女が輝いて見えるのは。

日が暮れても練習は続いた。今やアンプから漏れる音量はテレビのそれよりも下がっていて、カチカチという鍵盤を叩く音とベースを弾くアタック音ばかりが響いている。それでも輝には十分らしく、和奏のピアノや瑞希のベースに指示を出し、時には自身がベースを手にして例を示して見せた。

そして、七時。瑞希が自身の納得の行く演奏ができたところで、その日の練習は終わった。

遅くまで失礼しました、と輝と瑞希が言い、さあ帰ろうと玄関を出た時だった。

「雨が降ってるじゃねえか。……気づかなかったな」

空にはどんよりとした雲がかかり、しとんと予報外れの雨が降っていた。

同じマンションの一室に住む輝は問題ないが、瑞希はベースの持ち運びのために荷物を減らしていたため折り畳み傘を持っていなかった。

「風流さん、傘はありますか？ なければお貸しますが」

「ん、ないけど小雨だから大丈夫よ。見た感じこの家、傘一本しかないみたいだしね。明日も雨が降ったら困るでしょ」

「それは、そうですか……」

「なら俺が取って来るよ。家には二本あるし、いくら小雨だからって濡れて帰るのはいけないだろ」

「……じゃあ、お言葉に甘えさせて貰おうかしら」

「ああ。すぐに取って来るから、ちょっとだけ待っててくれ」

輝はそう言くと、和奏と瑞希を玄關に残して自分の部屋がある上の階へと向かって行った。

「今日は遅くまで付き合ってくれてありがとね」

無言で佇む和奏に、瑞希がそう言った。

「いえ、お気になさらず」

素っ気ない返事が返ってくる。それが別に怒っているわけでも、迷惑そうにしているわけでもないことに、瑞希は最近ようやく気づいた。輝曰く、ちゃんと感情を顔に浮かべる女の子らしいが、流石にそこまでの域には達していない。

どちらにしろ、決して苦手なタイプではない。むしろ、必死に周りの様子を窺って愛嬌を振りまいている同年代と比べると、和奏のことは好ましく感じている。

そんな和奏に今まではなかった興味を覚えているのも確かだ。……大体、いつまでも輝を間に挟んでコミュニケーションを取るなんてのは性に合わない。

「和奏」

あえて呼び捨てにする。和奏は一瞬だけ眉を動かしたが、何事もなかったかのように答えた。

「はい、何か？」

「あのさ、和奏は雨が好き？」

和奏は少し考えるような仕草をした後、口を開いた。

「好き、ではないですね。その雰囲気が好きだという感想は耳にしたことはありますが、私には理解できません」

「そうよね。あたしもそんなセンチメンタルな気分にはならないわ。服は濡れるし、髪も跳ねるし……ってこれは和奏の方が大変かしら」

「ええ確かに、これだけ長いと手入れは面倒ですね」

和奏は腰ほどまで伸びた長い髪を手ですいた。さらに、と何も引つかからずに手がすり抜ける。何だか、シャンプーかリンスのコマーシャルにでも出られるんじゃないかと思う。

「でも、それはきつと些細なこと。」

雨は必要なものです。当然のように雨の恩恵を受けている私達は、それすら忘れてしまっているのでしょうか」

その通りだ。この国は水に恵まれている。

「水が飲めなくても、死にはしないのにね」

死にはしない。だが、生きるのも苦痛でしかない。キャンセルがどのように発動しているのかは解明されていないが、鏡界の人間は水分を摂取しなくても生きることができる体を持っている。——ただし、生きるために必要最低限な機能のみを残して。

つまり、水を飲まなければ限りなく死に近い状況になる。現在でも、水を与えないことは拷問の中で最も使われる手法となっている。水は必要だ。雨は必要だ。たとえこんなちっぽけな自分が多少煩わしいと感じたとしても。

「だから、私の答えは“好きではない”です。決して嫌いではありません。風流さんは——瑞希はどうですか？」

「……私は、私も……嫌いじゃないわ。まあ、憂鬱な気分くらいに

はなるけどね」

「今も憂鬱なのですか？」

和奏が雨の降り注ぐ外を見やる。

「どうかしら？……少なくとも今、和奏と話している分には、決して憂鬱じゃないわ」

瑞希が軽く笑みを浮かべながら言うと、和奏も僅かに顔を緩めた。

「……久遠があなたを選んだ理由が少しだけ分かりました」

そう言って、人形のような少女は小さく笑うのだった。

「第3話 Day wonder day 完」

もう一人のハイダー

いつも通りの朝。

「久遠輝、だな？」

がっしりとした体格。スーツ。顔に傷跡。それを隠すようにかけられた黒光りするサングラス。誰かが見ればその道の人に見えてしまふような中年男性が、学園へと向かう輝の名前を呼んでいた。

「……えっと、そうですが？」

「久しぶりだな。元気にしてたか？」

「……………。ええ、まあ。そちらもお元気そうで何よりです」

輝は言葉を選びながら答えた。どうやら鏡界の久遠輝と顔見知りのようだ。……どんな経緯でこんな敵ついおっさんと知り合ったのか非常に気になるが。

「ああ？ 何か随分とよそよそしいじゃないか、輝？」

「いや、そんなことは……………ないですよ？」

「んん、いや、なーんか変だぞお前」

凄味のある顔を近づけられ、輝はたじろいだ。

もう少し歩けば、数日前までは輝の家にわざわざ迎えに来ていたが最近は通学路で合流するようになった瑞希の姿があるだろう。遅刻なんてした日には何を言われるか分かったものじゃない。この場はできるだけ穏便にかつ速やかにやり過ごしたいところだ。

「すみません、ちょっと急いでるんで、また」

「テロ、ハイダー、風流瑞希」

「――」

横を通り過ぎる瞬間に囁かれた心当たりの多すぎる単語に、輝は足を止めた。

「話がある。来れるな？」

それは確認ではなく、命令だった。

「いやいや、別に何かしようってわけじゃないさ。こんな出で立ちだが、別にお前を取って食いはしねえ」

おどけて肩を竦めてみせる。悪意はなさそうに見えるが、瑞希の“絶対に正体を知られるな”という忠告が頭を離れない。

「わりいな、さっきの久しぶりってのは嘘だ。

“初めまして”。神崎だ」

男——神崎はそう名乗って、輝を先導した。

神崎が案内した先は喫茶店だった。平日の午前中とあってか人の姿はない。適当に注文を済ませると、輝はため息を吐いて椅子に深く腰掛けた。

「……どこかの事務所にでも案内されるかと思った」

「ははは、そりゃあ映画の見すぎだ、ってね。

さて、改めて自己紹介するな。神崎だ。鏡界のお前さんとは知り合いだった……わけじゃない」

「……………」

——やはり鎌をかけられたか。

鏡界の久遠輝を演じるために取った態度を逆手に取られ、自分がハイダーだと知らしめる結果となってしまった。

「ま、警戒するなって言うのは無理な話だわな。気持ちは分かる。

何せ、俺自身もそうだった。ハイダーは自分の正体を隠すのは、基本中の基本だ」

「……あなたはハイダーなんですか？」

「ああ、そうさ」

あっさりと肯定される。

「無論、こちらの素性を明かすのはタブーってのは百も承知だ。

それでも鏡界に来たのは十年も前でな。何度かヤバい目に合ったこともある」

——ダメだ。これだけではまだ神崎がハイダーだと断定できない。

「……江戸時代を舞台とした殺し屋の物語。主人公は刀に毒をしこんで戦う非情な男」

「お、“毒殺のギン”か。随分と古い映画じゃねえか。何だ、いきなり……って、ほう、そういうことかい」

くつくつと神崎は押し殺したように笑った。

「これは一本取られた。お前さんも鎌かけたのか」

「……まあね」

輝は肩の力を抜いた。“毒殺のギン”は殺しをテーマとしていた映画だ。当然、キャンセルのある鏡界には存在しないことも確認済み。それを知っているということは神崎がハイダーだということは間違いないだろう。

「ブレインはあのお嬢ちゃんってところか？」

どうやら瑞希との関係もお見通しらしい。

向こうに害意があるならこの時点でどうにかされていてもおかしくない。これ以上シラを切るのは無意味だろうと判断し、とりあえずは向こうの出方を窺うことにする。

「何故こちらの事情を知っているんですか？」

「ん？ ああ、そりゃあ簡単だ。この目で見てたからだよ。シーカの嬢ちゃんがテロリストと銃撃戦をする中、お前さんが撃たれて傷つくのを」

「……………」

——見られていた？

「ま、偶然な。俺もハイダーだから本当は迂闊なことできないんだが、ちよつとワケありでな。テロの時に招集をかけられる立場なんだわ」

「……招集って？ キャンセルが使えないハイダーはどう考えても

足手まといでしょう？」

「それはお前、ハイダーには鏡界の人間にできないことができるかに決まっている。……ってお前、まさか知らないのか？」

サングラスに隠されて神崎の目は見えないが、何となく見開かれているような気がする。

「はい。どういう意味かさっぱり」

輝の返答に、神崎は大きく椅子にもたれかかった。

「……じゃあ何だ？ 風流瑞希はハイダーについて何もお前に聞かせていないのか？」

「誰にも正体をバラすなどは聞きましたが……」

「ふむ。キャンセルは知ってるよな？」

「はい」

この世界の人間は、故意に誰かを傷つけることができない。そのことは瑞希から詳しく聞かされている。

「じゃあ、ハイダーが例外だってことは？」

「例外と言うと……ハイダーはキャンセルが使えないということですか？」

「もう一つ。もっと重要な方だ」

輝は首を横に振った。

「はあ……何でそれを知ってて、一番大事なことを知らないのやら。まあ良い。ハイダーはな、他人のキャンセルも無効化できるんだ」

「……？」

一瞬、その言葉の意味が分からなかった。

「つまり、ハイダーは誰もがキャンセルを持つ鏡界で唯一、人を傷つけ、殺めることができるってことだ」

「……自分だけでなく、他人のキャンセルも無くしてしまう……」

「ああ、そうだ」

人を傷つけ、殺める、という現界ならば当たり前のようにできること。

だが、暴力も戦争もないこの世界では――

「そんなもん、この世界じゃ火種にしかない。
俺らハイダーは戦争のないこの世界で唯一の兵器なんだ」

どんな世界でも人は争う。

争いで勝利するための最も手早い方法は、いつの時代も圧倒的な暴力である。

この世界ではそれは禁忌だった。

僅かでも害意のある暴力は存在を許されない。

――しかし、もしも。

もしも、例外的な存在がいるなら。

暴力を振るえる存在がいるなら。

例えそれが人間でも、それは一つの“兵器”だ。

「そういうわけで、多大な危険を孕んだハイダーは、シーカーに厳しく取り締まられ――って言うよりは、見つけ次第片っ端から捕まえられている」

「待つてください。……シーカーに、ですか？」

真っ先に、一人の少女の姿が思い浮かぶ。

――シーカーが、ハイダーを……？

「ああ。ヤツら、世界平和なんて大義名分を掲げちゃいるが、実際の目的はハイダーを捜し出し捕獲、及び抹消することだ。昔のハイダーがやらかした事件とも相まって、この世界でハイダーは侵略してきた異世界人、なんて認識でしかない。……まあ、鏡界の住民からしてみれば俺らなんてのは、恒久的だった平和をぶち壊す核爆弾みたいなモンなんだろうな」

「……それで瑞希は正体を隠せと言ったのか」

ようやく瑞希がしつこく正体の隠ぺいに――取り分けシーカーに對して――念を押した理由が判明して、輝は呆然としつつも、いつ

の間にか再び張っていた肩の力を抜いた。

「何と言つか……すまん。まさか知らなかったとは思わなかったんで」

神崎が頭を下げるのを見て、輝は慌てて首を振った。

「……いえ、むしろ教えてくれて良かったです」

そんな大事なこと、いつまでも知らぬままで通せるはずがない。

何故瑞希が教えてくれなかったのかは分からないが、彼女だって近い将来輝がその事実を知ることが承知していただろう。

「……今日はここまでにしとくか」

輝の戸惑いを察してか、神崎がそう言った。

「本題には入れなかったが、そう急ぐ話でもない。まあ、ハイダーのお前にとって悪い話じゃないことは約束する。とにかく、また会った時にでも話させてもらおう。……それまでに、お前も自分の立場をもう一度考え直してみると良い」

「……はい。今日はどうもありがとうございました」

神崎はコーヒーを飲み干すと、伝票を持って立ち上がった。

「ああ、そうだ。釘を刺すようだが、俺と話したこと、そして正体に関しては風流瑞希も含めて誰にも言わないでくれ」

「瑞希も、ですか？……いえ。はい、分かりました」

「理解が早くて助かる。ではまた会おう」

店を去って行く神崎を目で追うこともできず、輝はカップの湯気をぼんやりと眺めた。

——瑞希はシーカーなんだよな

神崎も輝も、彼女達に捕えられる立場なのだ。

それなのに——

「神崎って知り合いのハイダーに聞いたんだけど、ハイダーって人殺せるんだってな。で、シーカーがハイダーを捕まえているんだろ？ それで何でお前は俺を捕まえないの？ あと、その神崎って人はどうするよ？」

——なんて、言えるはずがない。神崎に迷惑がかかるのはもちろんのこと、自分の立場さえも危ういのだ。

「……あぁっ、もうっ」

瑞希には話せない。だが、隠し事をするみたいで何だか後ろめたい。輝が大嫌いな“時間に解決させる”ことではないはずなのだが、このもやもやはちょっと長く続きそうだ。

そういうわけで。

「……学園、行こ」

差し当たって輝は、現実逃避することにした。

それはきつと人の弱さ故にある感情

翌日。再び通学路に神崎が現れた。

「……あのですね、鏡界の俺は一応学園生なのであまり遅刻はしたくないんですよ」

輝が頭を掻きながら言うと、神崎は肩を揺らしながら笑った。

「いや、すまん。風流瑞希と確実に鉢合わせにならないという時間があまりないものでな」

「……まあ良いですけど」

とは言え昨日の遅刻で瑞希にお説教を受けた記憶はそう忘れられそうにもない。あらかじめ、彼女には先に行ってくれと言う内容のメールを送っておくことにする。

「では、昨日と同じ店で良いか？」

「デートじゃないんですから、二日連続で同じ店に行ったらって不満には思いませんよ」

「ほう、お前は恋愛が得意なのか？ その年にしては女心が分かっているような口の利き方だが」

「んなことはありません」

「おいおい、そりゃあダメだな。若い内に色々経験しといた方が良いぞ。片思いなんてのは俺からしてみれば全くの無駄だ。失恋して得る物つてのものもある」

「失恋前提ですか。……そう言うおっさんはさぞ失恋の経験がおありなんだろうね」

おっさんの部分を強調する。

「いや、ない」

神崎は真顔で答えた。

「うわ、今、カチーンときた」

「……こう見えても俺は既婚者でな。妻とはお前くらいの年の頃からずっと一緒だ」

「それはそれで……あまり参考にならなさそうですね」

輝くらしい年で、思い出作りのためだか何だか知らないが付き合い
っているようなカップルは、大抵が進学などのちよつとした環境の
変化で別れるというのが一般的だと聞いたことがある。一途に思い
合うことができるのは素直に凄いことだと思うが、一般的な例とは
言い難かった。

「ま、生涯ただ一人を愛するってのもまた得る物が色々もあるも
んだ。

……さて、そろそろ向かうとするか、若人よ」

少し神崎に対する評価を改めた輝は、彼と共に朝日が照らす道を
歩き始めた。

「で、ハイダーの立場の危うさの認識と心の整理は付いたか？」

注文した物が届くと、神崎はそう切り出した。

「はい」

輝は頷く。

「それじゃ昨日言えなかった本題だ。まずは一つ聞かせてもらいた
い。

現界に戻りたくないか？」

「……！ まさか、戻る方法があるんですか？」

「いやいや、そんなのがあれば俺はもう鏡界にはいねえよ。

よって、お前の質問の答えはノーだ。——現時点では、な」

「……将来的には、戻る手段があるかもしれないですね」

「ああ、そうだ。それで、俺の質問に答えてもらっていないんだが
？」

「……………」

現界に戻りたいのか。

瑞希に聞かれた時には、現界に戻る手段があるのなら探したいと

言った。だが、自分が鏡界に跳んだ意味も知りたいから、まだ戻りたいかどうかの判断はできない、と。

「……分かりません。戻りたくないと言えば嘘になりますが、今すぐには思わないです。もしかしたら俺がこの世界に跳んで来たのには何か意味があるのかもしれないから、それを見つけるまでは」

輝の言葉に神崎が信じられないといった風に首を振った。

「おいおい、思ってもいないことを言うのはやめにしないか？」

「思ってもいないことなんかじゃ——」

「それはてめえの口実だろ。自分を騙して割り切れることは大切だが、だからと言って物事から目を逸らして良いわけじゃない。」

お前は何だ……アイデンティティがないと生きられないのか？

俺らのしていることは、今まで違う人生を送ってきたもう一人の自分と入れ替わって、そいつの生活を奪い取ることなんだぜ？」

「だとしても、俺は——」

「青いなあ。青い。世間つてもんを知らなさすぎるよ、お前は」

「……子ども扱いしないでください。このまま惰性で生きるのはいけないことくらい、俺にだって分かっています」

「いや、甘いな。その程度の覚悟じゃ鏡界では生きて行けない」

「その未来を決めるのは俺であって、あなたじゃない」

「……まっ、そりゃそうだな」

それ以上食い下がることはなく、神崎は一息入れるようにカップに口をつけた。

「やめだ。お前がイエスと答えたのなら話をするつもりだったけど、そんな曖昧な精神の持ち主には興味がない」

そして、話を締め括るようにこう言った。

「その根拠のない自信は、いざとなれば風流瑞希が助けてくれるからだ、という妄信に過ぎないんじゃないか？」

「——」

「違和感どころの騒ぎじゃない。全てが少しずつズレていて、結果的に何もかもが破たんしている生活で、理解者がいることはさぞかし頼もしいことだろうな？」

ねっとりとした、蔑むような口調で神崎が言う。サングラスに隠された瞳に輝は恐怖を覚えた。

神崎の言うことは正しい。理解者なんている方がおかしいのだ。鏡界の住民からしてみれば、ハイダーは並行世界から跳んで来た異端者であり、自分の命を脅かす存在に過ぎない。

避けて当然。ましてや、匿おうなどと思うはずがない。

自分は恵まれている。

そして甘えている。

輝は返す言葉など持ち合わせていなかった。何故ならば、瑞希の存在が輝の心の支えになっていたのは間違いなかったからだ。

「最後にハイダーの先輩からの忠告だ。

シーカーはいつだって俺達の命を狙っている。風流瑞希が何を考えているのか俺には皆目見当もつかないが、もしお前の正体を誰かに言い触らそうとしたのなら、彼女を殺してでも生き延びろ。殺しはこの世界で唯一ハイダーにのみ許された権利だ。使うことを躊躇うと、殺されるという代償を持った俺たちには相応の痛みが返って来ることを常に頭に入れておけ。

誰が敵か、じゃない。全てを疑い、全てが敵だと思え」

神崎は言い終わると席を立ち、去って行った。

輝は、昨日は目を向ける余裕すらなかった神崎の後ろ姿を無言で見送ることしかできなかった。

憂さ晴らし

「……少し言い過ぎたか」

神崎は市内にあるマンションの一室に帰ると、サングラスを外し、スーツを脱ぎながら独りごちた。

失望。彼が感じているのは失望だ。

年端もいかぬ少年に過度な期待をした自分に非があるのは事実である。神崎が独自に入手した映像で見た久遠輝は自分の身を顧みずに誰かを助けに向かうことができる男だったため、並行世界に跳んでしまったことによる精神的な不安などが全くない人間なのだと思いを込めてしまっていたのだ。

輝が自分の存在の意味を探すというようなことを言っているのは、恐らく無意識の内の自己防衛反応だろうと神崎は推測していた。そうでも思わなければ生きることが辛いのは理解できる。ましてや、自分の知らない世界での生活。いくら勇気ある——この場合は蛮勇であると言つべきかもしれないが——少年といえども、不安になるのも当たり前と言えば当たり前だ。

そんな不安は自分も経験したことであり、慣れるまでは時間がかかったのも鮮明に覚えている。

故にこの失望は輝に向けたものではなく、自分に対してであった。もしかしたら輝は自分の力になる存在かもしれないと思つたが、残念ながら望んだ人物像ではなかったようだ。何より、時期が早すぎたのもいけなかっただろう。

——それはもう仕方のないことだ。

思考を切り替える。自分の目的を達成するためには、こんな所で立ち止まっている暇などない。

神崎はリビングのテーブルに飾られた一枚の写真の縁をそつと指で撫でた。

「……待っているよ、明日香」

神崎に一本の電話がかかってきたのはそんな時のことだった。

「つまんない」

その日の音楽の授業で練習している時、椎名が曲の途中で演奏を止めて言い放った。

「どういうこと、椎名？」

自分のミスはなかったはずだと言わんばかりに、瑞希が真っ先に口を開く。

「音が揺らいでいる。こんな状況で叩きたくない」

「……気分が乗らないってこと？」

「そんな感じ」

「だからって……今はそんなことを言っている暇はないでしょ」

「分かってるよ」

「なら——」

「だからこそ、こんな中途半端な状況で叩きたくない」

「……どうして」

「元々、僕が君らとやる理由は一つだけなんだ。分かってるよね、輝」

瑞希と話していた健が、輝に目を向けた。

「……分かってる。すまない、シータケ」

瑞希は憮然とした表情で輝を見つめていたが、やがて「今日は個人練習させてもらっわ」と言い、それ以上何かを言い募ることはなかった。

放課後。当番だった掃除を済ませて帰り支度をしていると、教室の入り口で瑞希が缶コーヒ―を手に輝を待っていた。

「お疲れ様。差し入れよ」

「……ありがとう」

珍しいことだ。輝は多少面喰いながらもそれを受け取った。

瑞希の手にはもう一本同じ種類の缶が手にあって、輝は彼女の意図を悟る。お茶の誘いなのだろう。

「中庭にでも行かないか？」

「ええ」

輝が言つと瑞希は眉一つ動かさずにその提案を呑んだ。

二人は鞆を手にし、中庭に向かった。

心地よい風が中庭の芝生を撫でている。

シエルターの隠された巨木の葉からは木漏れ日が差し込んでいて、少しばかり暑さも感じるくらいだ。

夏はもうすぐそこまで来ている。いや、暦の上ではもう夏になるのか？

コーヒーを飲みながら、輝はそんなことをぼんやりと考える。

「あんた、何かあったの？」

「……………」

瑞希らしいストレートな問い。それに輝はどう答えるべきか迷った。

神崎が言つた、全てを疑い、敵だと思えという言葉が輝を惑わせていることは自分でも分かっている。

「いや、何も無い」

「……嘘」

「ホント」

結局、こう答えるしかなかった。

神崎を巻き込む可能性がある以上、彼と話したことを瑞希には言わない。その姿勢は輝の中で変わっていないかった。

「次の授業までには元通りにしとく。これ以上シータケに嫌な思いはさせたくないしな」

「……話す気はないってことね。まあ良いわ。無理に聞こうっていうわけではないから」

「ありがとう」

「……ところで椎名が言ってた、私達と一緒にやるただ一つの理由って何なの？」

「アイツなりに思うところがあるんだろう。音楽が好き、とか」

「そっちも言えないのか。もう良い、輝、ちよつとこの後の時間もらうわよ」

「うん？」

「つまり――」

瑞希は残っていたコーヒーを一気に飲み干して缶をゴミ箱へ投げた。

「憂さ晴らしするの」

「……ナイスシュー」

缶は綺麗な放物線を描いてゴミ箱へと吸い込まれていた。

半ば強引に瑞希が案内した先は、ゲームセンターだった。

雑多な音が店内を満たしている。耳の良すぎる輝はこの音が苦手だったため、あまり訪れたことはない。

「さー、やるわよー！」

腕をぐるぐると振り回し、瑞希は獲物を見定めるように店内を見渡した。

「まずはガンシューティングから。輝、あんた2P側ね」

百円玉を取り出し、その手でビシッと輝を指差した。

「あ、ああ」

瑞希のペースに翻弄されながらも、輝は彼女の隣に立ちコインを投入した。

「ほら、銃持たなきゃ始まんないでしょ！」

「分かったから銃を突きつけるなっ」

その姿にデジャブを感じつつも、見よう見まねで銃を構える。

「持ち方が違うわ。こつよ、こつ」

「……こうか？」

「違う、もつと脇を締めて……ああもう！　じれったいわね！　ストーリーが終わっちゃうじゃない！」

「うおっ」

瑞希が背後から腕を回し輝の腕を掴む。

柔らかな肢体が密着して、微かに胸のふくらみすらも感じるほど。その上女の子の香りが鼻を攪り、一向に銃の構え方には意識が向かう気がしない。

「力を抜かないで！」

叱咤され、輝は何とか瑞希に預けていた腕に力を込める。

「よし、良いわね。」

リロードの仕方は分かる？」

「リロード？　いやこの手のゲームは初めてだからさっぱり」

「こつよ。こつ」

輝の手を掴んだまま手首を小さく振り、手本を示す。

「こつか？」

「ひゃっ」

「……どうかしたのか？」

輝が腕を振ってみせると、瑞希がやけに甲高い声を上げた。

「……ううん、何でもないわ。もう一回やってみて」

「……ああ」

ガシャ！

「ひゃう！……ちょっと腕の動きが大きいかも。もつと小さくしないとタイムロスが」

「分かった。……てか、本当に何でもないのか？」

「良いから！　はい、リロード！」

もう一度、今度は小さめに腕を振る。

「……よし、耐えた」

「？」

「……合格よ、合格。とにかくあんたはカーソルが合わなくても撃

ちまくりなさい」

「撃ちまくればいいんだな。分かった」

瑞希の体が輝から離れる。

リロードの動作をする度に、自分の二の腕が当たっていた部分に輝は最後まで気づくことはなかった。

「ま、最後の方はそこそだったわね」

瑞希は百円、輝が三百円をコンティニューにつき込んだところでガンシューティングゲームはやめることになった。

ゲームが始まった頃は慌ててしまい、言われた通りに銃を乱射することしかできなかったが、徐々に相手の弱点などにも打ち込めるようになり、最後にはステージのボスも倒すことができた。

初めてプレイするにしては悪くはなかっただろう。

「しかし、瑞希は随分と上手いんだな」

「まあ、それでもシーカーだからね」

「はー、そう言えば、銃のゲームとかは普通にあるんだな、ここ」

「シーカーでもなければ決してできないことだから銃に憧れがあるんでしょね。ま、人を撃つゲームじゃなくて、さっきのヤツみたいにモンスターを倒す系しかないけど」

「なるほどね」

「じゃ、次行くわよ、次」

「おう」

すっかり瑞希のペースだが、輝自身も十分楽しんでいるので彼女に任せることにしよう。

そう決めて、輝は弾むような足取りで歩く瑞希の後を追った。

その後、メダルを二人合わせて百枚だけ買って遊んだり（そのほとんどを使い切ったのは瑞希）、音楽ゲームに挑戦してみるも実際

の演奏程には上手くいかなくて苦しんだり、クイズゲームで中卒の輝の知識不足が露呈したり、と店内を色々と巡って楽しんだ。

そして――

「勝負よ」

クレインゲームの前で瑞希がそんな提案をした。

「そろそろ時間も時間だし、これで最後。今までののは協力ばっかでつまんなかったから、最後は互いに勝負がつくものにしましょう」

「……良いぜ。ルールは？」

「先に景品を取った方の勝ち。ただし、客観的に見ても小さい物に分類されるような景品はなし」

「了解。サクツと終わらせてやる」

「何それ、完全に負ける人のセリフじゃない？」

「言ってる。じゃ、今からスタートな」

「オツケー。またね」

瑞希と別れると、輝は取りやすそうな景品を求めて早足で店内を巡った。

とは言え、アームの強さばかりは実際にやってみないと分からないため、どれに挑戦するかを慎重に選ぶ必要がある。その上プレイにも時間がかかるこの局面で狙うべきなのは――小さすぎず、かつ軽そうな景品。

「――これだ」

輝は約十五センチ四方のぬいぐるみが積み重なったクレインゲーム機の前で歩みを止めた。

アームが片方しかなくて一見取りにくそうにも見えるが、こういう物は上の方から崩せば大量に獲得することもできる可能性があるサービス機だ。

だが今狙うのは複数景品の同時獲得ではない。欲をかかずに開口部に近い一つだけを狙えば、取ることはそう難しくないはずだ。

決断すると輝の行動は早かった。横から一度覗いて奥行きを測ると、手前の黒い塊（残念ながら顔が見えないのでそれが何なのかは分からない）に狙いを定め、即座にコインを投入した。

「む、先を越されたわね……」

そこで瑞希の声が聞こえ、輝はそちらにチラリと目をやった。どうやら瑞希もこれは取りやすそうだと思っただけらしい。

「小さくはないよな？」

「ええ、そうね。……じゃ私はこれにしよう」

瑞希は輝の背後のクレイニングゲームに挑戦するようだ。

輝は意識を目の前に戻し、ゆっくりとボタンを押した。

「よっ……しゃあっ!!」

自分の年齢も忘れて輝は高々と歓喜の叫びを上げた。結果はまさかの一発ゲット。浮かれるのも無理はない。

「なっ？ ホント!? ……あーあ、あたしの負けか」

一回目は失敗したらしい瑞希が側に寄って、輝の手に収まった戦利品を見ると肩を落とした。

「てか、何、そのぬいぐるみは？」

「ウサギ、だと思う」

「何か……クマにも見えるわね」

一気に危険になったな。まあ、危い種類ばかりでもないだろうが。で、だ。俺の勝ちでオーケーな？」

「く、悔しいわね」

「ははは、だからサクッと終わらせるって言っただろ」

「むっ」

「ということで、これは瑞希にプレゼント」

「……当てつけ？」

「俺に憂さ晴らしをさせてくれたことへの感謝」

「……受け取ってあげるわ。でも、貰いっぱなしってのは気に食わない」

瑞希は輝からひったくるようにウサギのぬいぐるみを受け取ると、それを胸に引き寄せて、くるりと反転した。

「あたしも一つ取ってくるから、あんたにはそれをプレゼントし返してやるわ」

「……楽しみに待ってる」

瑞希は再度挑戦するために、クレーンゲームの並ぶ他の列へと消えて行った。

「俺を騙してるようには見えないんだよな……」

瑞希を見送りながら、輝はそう呟いた。

瑞希は自分を捕まえるために虎視眈々と何かのタイミングを窺っているようにはどうしても見えない。

シーカーとハイダーの関係を知った今もなお、瑞希にハイダーの自分をどうにかするということとは思えない、というのが輝の出した答えだ。

神崎はそれを妄信だと言った。……確かにそうなのかもしれない。しかし、全てを疑うことなど、輝にはできなかったのだ。一度信じた人を、自分の命を救いこの世界で生きる術を教えてくれた人を疑うことなど。瑞希を疑うと言うことはつまり、信じた自分をも疑うことになってしまう。——そうではありたくないと思っただ。

「………電話？」

不意に輝の携帯電話が震え、着信を知らせた。

ディスプレイには登録されていない番号が表示されていた。心当たりがまるでない。

「はい、もしもし？」

近くにある出入り口から店の外に出て、通話ボタンを押す。

「電話口から飛び込んできたのは聞き覚えのある声だった。」

予期せぬ再会

「輝」

名前を呼ばれ、輝は通話を終えた後も耳に付けたままだった電話を下ろした。

「何よ……どこに行つたのかと思つたら電話だったのね」

「あ、ああ。悪い」

「別に良いわよ。それより、ほら」

瑞希が何かをこちらに放り投げてくる。慌ててそれをキャッチした。

「あれから一回で取つてやったわ」

「凄いな。これ、時計か？　こういうのって結構難しいと思うんだけど」

箱の中には懐中時計が入っていた。なかなか重いから取りにくいことは想像できる。

「ま、あんまり実用性のない物を取つても嬉しくないでしょ？」

「……そう言われると、ぬいぐるみを取った俺が申し訳ない」

「あ、あれはあれで別に良いわよ」

その言葉に瑞希も女の子なんだと、今更ながら改めて思う。

「とにかく、これで貸し借りはなしだからね」

「ああ」

「んじゃ、そろそろ帰る？」

「そうするか」

帰路に着く。

「……あんた、何かやけにキョロキョロしてない？　何か気になるの？」

その途中、何故かぬいぐるみを袋に入れずに抱きしめたままの瑞

希が、輝の様子に耐えかねてそう言った。

「いや、別にそんなことは……」

と言いつつも輝は目を左右に振り、小さな物音にも敏感に反応している。

瑞希が訝しげな表情を浮かべて輝を見つめた。ゲームセンターを出てから輝はずっとこの調子だから怪訝に思うのは無理もない。

——神崎に気を付けて。彼は君のことを狙っている。

電話の内容が頭の中で繰り返されている。

あの電話の主はどこか聞き覚えのある声で、輝に謎の忠告を残していった。

その声は、まるで輝がハイダーだと知っているような口ぶり。

そして、神崎が輝の命を狙っているかのような警告。

神崎が輝を狙っている。つまり、何らかの危機が輝に差し迫っていると言っのたろう。

もちろん電話の主の言っていることを簡単に信じることはできない。

——だが、もしそうだとしたら……。

全てを疑えと神崎は言った。あれは神崎本人をも疑えという意味なのだろうか？

とにかく輝は、電話の忠告を聞いてから自分に監視の目がついているような感覚が離れず、自分でも分かるほどに不安定な状態になっていた。

「分からねえ……」

何を信じ、何を疑えば良いのだろうか？

色々な思惑が輝の周りにあるようで、それが知らない内に大きくなっているようで……だんだんそれが分からなくなってきた。

疑念が渦巻いて、余計なことまで考えてしまう。

——もしそうだとしたら。

「何が分からないのよ？」

——瑞希が、何らかの目的を持って輝に接しているとしたら。

「ねえ、あんた、本当にさっきから変よ？……体調でも悪いの？」

——こちらを心配そうに見る瑞希すらも疑えと言っのか？

そこまで考えて。

「ごめん。ちよつと疲れたみたいだ。今日は帰って寝る。……じゃあな」

そんな自分の思考に輝は激しい苛立ちを覚えた。

信じると決めた人をいとも簡単に疑いそうになる自分が最低だと思った。

「ちよつと、輝」

思考と瑞希を置き去りに、輝は走り出した。

——本当に最低だ。

逃げ出すように瑞希と別れた。
道を転がるように走る。

「……神崎」

その道に神崎が佇んでいた。

ただ一人。

それほど狭い道でもないはずなのに、他の通行人の姿は見当たらない。

神崎は夜の街灯の光を浴びて、まるでスポットライトに照らし出された役者に見えた。

何故、彼がここにいいのか。何故、自分を待っているような様子なのか。

輝は先ほどの電話の警告を思い出し、反射的に身構える。

「どうした、久遠輝？　どこか俺を警戒しているようだ？」

「……あんた、纏っている空気が前と全然違うんだよ」
今まで使っていた敬語すら忘れ、輝はそう答えた。

「話があるから、ついてきてくれないか？」と言うつもりだったんだがな」

「……答えはノーだ。断る」

言うや否や、輝は踵を返して走り出そうとする。それで振り切れ
ると思うくらいには神崎との距離はあった。

「——そのようなので、悪いが少々手荒に行かせてもらっ」

しかし、それは距離の問題ではなかった。

次の瞬間、目にも止まらない速さで肉薄してきた神崎によって輝
の意識は刈り取られていた。

記憶。どこか遠い世界での、誰かの記憶。

——その世界で少年は戦っていた。

死の臭いが辺りに満ちている。周囲に目をやれば、既に命を失っ
た連中。

——その世界で少年は生きていた。

悲しげに自分を見つめる少女を想う。生きる。生きることしかで
きない。

——その世界で少年は求めていた。

どれだけ生活が変わろうと、何かが足りない気がした。埋まらな
い心の隙間。……求めている。何かを。誰かを。

ただ一つだけを。

そんな、遠い世界での誰かの記憶。

不意に、ぞつとするほど、身近に感じた。

「……ここは？」

輝が目覚ますと、そこは暗闇だった。

「……っぐ！」

体を動かそうとするが、何かが手足を束縛していてそれは叶わない。

徐々に目が慣れてくる。

そこは、安ホテルの一室のような小さな部屋だった。

「起きたか？」

頭上から声が降ってきて、輝は目だけをそちらに動かす。神崎が天井の光を背に立っていた。

「……どういうことですか、これは？」

「端的に言うなら——事情が変わったため、お前をとある場所に連行することになった」

「連行するって……」

「……俺にも責があることだ。人払いは済ませてある。可能な限りの説明はしよう。」

「……」

首を僅かに縦に振り了解の意を示す。手足を縛られた今、輝に主導権はないことは明らかだった。

「まずは、俺の身分を明かそう。——俺は世間の言うところでのテ

ロリストだ。先のテロの事件で襲ってきた隣国のある組織に属している」

「……ハイダーだというのは嘘だったんですか？」

「いや、それは本当だ」

「なら何故……っ」

この人は鏡界でハイダーが生きるためのアドバイスをしてくれた。人格者なのだと思う。誠実な人間にも見えた。

それだけに神崎がこのような理不尽な暴挙に出るのは信じがたかった。

「事情が変わったと、そう言いましたね？ 何が変わったんですか」

「ああ。当初の俺はお前を拘束する目的の下に接触を図ったわけではない。

始まりは、この街を標的にした作戦から帰還した者の映像を偶然俺が回収し、とあるハイダー……お前のことを発見したことだ。……俺はチャンスだと思った。何せ、俺以外の組織の連中は誰もそのことを知らない。

現界の人間と個人的な協力関係を結びたいと思っていた俺は、お前に会うことにした。結果はまあ……お前さんの精神状態が不安定な時期だったため、協力関係を結ぶことは断念することになったが、とにかく、それで終わりのはずだった。俺とお前は二度と関わることもなく終わる……そのはずだった」

神崎はサングラスの縁に手を当てた。

「——だが、組織はそんな俺の様子を監視していた」

その眼光がレンズの向こうで鋭く光ったように思えた。

「お前についての調査が行われ、俺が手に入れたものとは別の映像からお前がハイダーだということが判明した。ハイダーは鏡界で唯一の戦力。見過ごすという手はない。——直ちに久遠輝の拘束、及び本国への連行が命令された」

「……………」

言葉を失った。

喉が渴いて貼り付く。

たった今、地獄行きを宣告されたような、そんな妄想すら覚える。自分の命が、自分の知らぬ間に破滅に向かっている。

「あなたは何故、それでも尚、組織の命令を守ろうとするのですか？」

こんな状況だからだろうか。自分でも不思議なほど輝は冷静に言葉を紡いだ。

「……妻がいると言ったな」

返ってきたのは繋がらない答えだった。

「この世界の縁と言う物は実に不思議だ。知り合いだった人間が、知り合いではない。知らなかった人間が、親しげに話しかけてくる。最初は頭が狂いそうだったよ。」

だが、ただ一人だけ、現界と鏡界で俺との関係も何もかもが変わらない人間がいた。それが俺の妻……明日香だった。運命、そんな曖昧なものすら信じてしまいたくなるほど……嬉しかった。明日香の存在に途方もないほど救われた。

しかし、そんな生活にも小さなほころびは生まれてしまう。ふとしたきっかけから明日香は俺がハイダーだと知ってしまった。……その時の絶望感、そして、その後に続いた感情を俺は生涯忘れないだろう。——明日香は、俺を変わず愛すると言ってくれた。この世界では徹底的に忌み嫌われたハイダーを、だ。……俺はこの並行世界で生き抜く覚悟をその時初めて決めた。

……そうして今まで以上に幸せな生活が始まった。だが……それはそう長く続かなかった。俺がハイダーだということがあるテロ組織に伝わり、彼らは俺に仲間になるように脅してきたんだ。もちろん、俺はそんな誘いなど一蹴した。……その翌日のことだ。——明日香が誘拐された。人質。俺は彼女を守ることができなかった。俺は組織に入った。それ以外の選択肢はなかった。明日香が俺の人生の全てだったからだ。

気が付けば、組織に入ってから六年、こちらの世界に跳んでか

らは十年が経っていた。……明日香とは作戦を成功させた後の数時間だけ面会を許されている。俺はその数時間のために、見ず知らずの人間をハイダーの力を以て殺し、たった今もお前を拘束している」

「………」
「詫びるつもりはない。俺のミスがお前のこの状況を導いたのは確かだが、明日香以外の人間がどうなるうとも俺は一切気に留めない。そういう風に今まで生きてきた」

そう言い切り、神崎は輝に背を向けた。

「……これは組織を出し抜いて協力者を作り、組織を壊滅させて妻を救い出そう、と……そんな浅はかなことを考えた俺への警告なのだろうな……」

神崎が部屋から出て行く。

「……くそっ」

扉が閉まると、輝は悪態を吐いた。

神崎の十年間と自分の数週間にも満たない鏡界での暮らしを比べる気はない。

だが、ぬくぬくと鏡界での生活を送っていた自分を恥じたくなかった。

誰が神崎を責めることができるか？

——誰も責めることなどできない。

愛する人のために誰かを犠牲にしても生きる。

どの世界だって、誰にだって、その感情を否定することだけは決してできないのだ。

「……くっそ！」

この湧き上がるような怒りと、これから先の未来に感じる不安を、一体どこに向ければ良いのだろうか？

身動きもできないまま、輝はただ時がいたずらに過ぎるのを待つことしかできなかった。

走れ！！

「あゝあ。だから、気を付けろって言ったのにねえ」

久遠輝が神崎に捕えられる場を自分の目で確認して“彼”はため息を吐いた。

電話での忠告はあまり効果がなかったようだ。

「まっ、あの場合じゃ仕方ないか」

もう十年も鏡界にいる神崎に対して、久遠輝はあまりに無力だ。どれだけ注意を払ったところで、あの事態を回避することは不可能だっただろう。

神崎は待機させていた車に輝を乗せて、そのまま走り去っていく。
「ふむ」

あの方角から考えるに恐らく第二漁港だろう。あそこは現在の漁港が完成する時まで使われていたが、その機能の全てが第一漁港に移された現在では無人の資材置き場と化している。

他人の目を忍んで海に出るには絶好の場所だ。

そう――他人の目はない。

「……………」

彼は少しの間思考を巡らせると携帯電話を取り出した。かけるべき相手はただ一人。

着信履歴からその相手の電話番号を呼び出して発信する。

「………… あっ、もしもし。俺だよ、俺、俺」

いつもの軽いノリでスピーカーに話しかける。

電話越しに、いつもの不機嫌そうな声が返ってきた。

まただ。

また何かが自分の中に流れ込んでくる。

——記憶。どこか遠い世界での、誰かの記憶。

その世界の少年は、ただ一つだけを求めている。

でも、彼の目に映るのは、いつも望んだ光景ではなくて。
悲しく、寂しく、切なく、そんなものばかりで。

少年はいつしか、気がつく。

この自分ではダメなんだと。

求めているものは決して手に入らないと。

何故なら——それができるのは、どの世界でもただ一人だけだから。

そして、その一人は自分ではないから。

だから、少年はその一人に託すことにした。

そのためには気の遠くなるほどの準備がいると知っていて、それでも彼は諦めようとはしなかった。

——彼は何を求めていたんだろう？

記憶は酷く曖昧で形すらなく、ぼんやりとした一片しか見えない。
その中で、何か光る欠片を見つけた。

あれだ。きっと、あれが少年の求めていたものなんだ。

少年の求めていたそれは——

次の瞬間。

まばゆい光が、世界一面に広がった。

光が散る。目はまだ慣れない。

闇が出る。次第に浮かび上がってくる形。

その先に待っていたものは――

「なんだ……今の……」

閉じ込められた独房のような部屋からどうにかして出られないかを探ったが、どうやら無理だということが判明してふて腐れるように横になった。手足を縛られているからロクに眠れるはずもないだろうと思いながら、少しだけ目を閉じた。

輝がした動作はそれだけのはずだった。決して眠ってなどいない。だというのに、目を開けた今、長い夢を見ていたような心地を覚えるのはどうということだ？

ドクン――

心臓が自らの命を確かめるように強く脈打つ。体にも違和感があった。四肢が上手く動かせない。これはそう……まるで初めて鏡界に跳んで来た時に感じた、自分の体が自分のものではないような感覚だ。

「……どうなつてんだよ」

輝の呟きが狭い空間に取り残されるように響いた。
変化が訪れていた。

「準備が整った。行くぞ」

輝が目覚まして数分の後、神崎が背後に数人を従えて、再び輝を捕えた部屋に入ってきた。

その連中に手の錠はそのまま足枷だけ外され、脇を抱えて無理やり立ち上がらされる。

「これから船に乗る。……海に飛び込んで逃げようなんて考えるなよ」

「……それは皮肉ですか？」

輝は肩を持ち上げ、自分の周りを示す。

神崎とその仲間が四方を囲んでいた。海に入る隙など全くと言って良いほどない。それほどまでにハイダーは重要視されているということだろう。

神崎が小声で取り巻きに何かを指示すると、移動が始まった。

部屋から出て、廊下を暫く歩くと扉から外に出る。

外の景色は真っ暗で、輝はようやく現在の時間帯を把握できた。静謐な夜だった。

こんなに穏やかで平和な夜に、誰も知らないまま、この夜に溶けるほど静かに、久遠輝はこの街からいなくなる。

「……………」

歩きながら、何気なく空を見上げる。

下弦の月がそこにはあった。

欠けている月は、まるで誰かが不敵に微笑んだ時の吊り上げられた唇のようだ。

「……………うあっ！」

空を仰いでいた輝は、一瞬、そのうめき声が自分の真横から発せられたことに気づけなかった。

慌てて目線を下げると、輝の右隣にいた人が地面に倒れ伏せていた。

「何だ……！？……うつ！」

また一人、今度は左隣の男が倒れる。

カランと音を立て男の前に何か小さな塊が落ちた。

「これは……………」

神崎が叫んだ。輝にもその正体が分かった。

——催眠作用のある銃弾での狙撃だ。

「船から人を呼び出せ！」

「無理です！ 距離がありすぎます！」

彼らが言い争っている間にもまた一人倒れていく。
輝を囲んでいた人間はもういなかった。

「走れ！！」

その時、どこからか声が聞こえた。

——数人の怒声が入り乱れたこの場所で、それでも、輝は無意識の内にそれが自分に向けられた言葉だと知っていた。頭ではなく、心が命令を出す。走れと。その言葉に従えと。

それまで呆然と立ち竦んでいた輝は、弾かれたように走り出す。前へ、前へ。後ろを振り向くことは恐ろしくてできない。がむしやらに前だけを見て走った。

資材が散乱している場所なのが幸いした。隠れ場所はいくらでもあるし、探すのも難しい。その中に輝が紛れ込むと、追手がたたらを踏むのが分かった。

そして、彼らに生まれた隙を突いて、またどこからか狙撃が浴びせられる。一人、二人と倒れる。

この場を支配している側は明らかだった。

「ちい……撤退だ！ 一旦船まで戻る！」

どこからかそんな声が聞こえてきて、足音が遠ざかって行く。自分の周囲の物音が、一つの例外を除いて全て消えたことを確かめて、輝は肩の力を抜いた。膝に手を当てて息を大きく吐く。

資材の影から足音が一つ近づいて来た。その音だけは例外だった。

「よく、頑張ったわね」

輝はそれが自分に向けられた言葉だと……良く知っていた。

「ありがとう、瑞希」

こんな時でも、やっぱり彼女は……風流瑞希は、下弦の月のような不敵な微笑みをたたえているのだった。

どこか遠い世界での、誰かの記憶

「状況は把握したわ」

瑞希に促されるまま少しだけ移動し物陰に隠れると、一通り神崎の出会いから先ほどの話を手短に話した。

それが終わると瑞希からも情報を聞く。瑞希の方は第二漁港に不穏な動きがあるから偵察してこいとの命令を受けて、来てみたらこの状況だったということだった。

「……まったく、偵察のつもりだったのに……何でこんなことになつてんのよ」

「……っで」

瑞希は肘を輝の頭に振り下ろした。手加減されているもののそれなりに痛い。

「あんたはね、初対面の男のことなんか気にしてないで、さっさとあたしに話せば良かったのよ。」

自分と相手、どっちが大事ななんて考えるまでもない」

考えが甘い、と言いたいのだろう。……もつともだ。結果がこれじゃ、否定のしようもなかった。

「……ごめん」

「もう良い。それより今はここからの脱出を考えないと」

「……了解」

第二漁港の地理的に、本島との間に架かっている橋が唯一の道だ。そこを塞がれたら、逃げる術はない。

「来るときはどの経路からだったんだ？」

「海からよ」

「じゃあまた海から逃げれば良いんじゃないのか？」

「……」

瑞希はしばし顎に手を当て、その手を下ろすと首を縦に振った。

「……それしかないってのは分かっているんだけどね」

「何か問題でも？」

「本来ならば援軍を呼んで、あたし達はこのまま身を隠すつてのが正解」

そうできない理由がある。それはつまり、

「……それって、もしかして俺がいるから——」

シーカーを呼べないってことか、と続けようとした言葉は、しかし瑞希に遮られた。

「どちらにしろ、今できる最善を尽くすだけね。……大丈夫よ、あなたの判断は間違つてないわ。海から逃げるわよ。確認しとくけど、あんた泳げるわよね？」

「あ、ああ。人並みには、多分」

「よし。さ、海まではざつと百メートルくらいかしらね。そこまで移動するわよ。……あなたの耳も頼りにしてるからね」

「……任せてくれ」

瑞希が気遣いやフオローのつもりでなく、本心からそう言ってくれていることが伝わったからこそ、輝はできるだけ力強く頷いてみせた。

輝の聴力の良さと瑞希の先導により、海への移動は輝が思っていたよりも容易にできた。

というより、監視などは一切なかった。不思議なほどあっさりと辿り着くことができたことにむしろ違和感を覚える。

それでも、海からこの場を脱出するという計画を変えるわけにもいかない。

目の前の、まだシーズンには二か月も早いであろう海水を見つめて輝は体を震わせた。

「良い？ 最初はできるだけ遠くまで潜って行けるとこまで行くのよ。それで、息継ぎする時は水を跳ねないように」

瑞希はそう忠告すると、おもむろに上着に手をかけた。

「つて、おいおいおい」

「……あんたも早く脱ぎなさいよ。服着たまま泳ぐ訓練なんかしてないでしょ？」

「そりやしてないけどさ。……それでも年頃の羞恥心やら、異性の体への関心を排除しろというのは無理な話であって……いや、なんでもありません」

そんなことを言っている場合じゃない。服に手をかける。

と、その時、背後から、全てを飲み込むような音が襲いかかった。

いや、音よりも光が先だったのかもしれない。

辺り一面に広がる光。

爆音。

そして、衝撃。

熱い風が背中を押し出す。

それが何だったのかを理解する時もなく、輝、そして瑞希は、眼前に広がるに向かって投げ出されていた。

吹き飛ばされる。

——あれ、これって爆弾でも落ちたのか？

自分の意思とは関係なく宙を舞いながら、体中に突き刺さるような肌を焼く痛みを感じながら、そんなことを輝は思う。

——瑞希。

彼女もまた、輝のように体中に火傷を負いながら宙に体を投げ出されている。

キャンセルが発動しない——つまり神崎の仕業か。

そこまで考えて、死を直感的に感じた輝は思考を放棄した。

意識が闇に落ちて行く。

僅かに残る意識の端で、幾度か垣間見た誰かの記憶が自分に流れ込むのを輝は感じていた。

記憶。どこか遠い世界での、誰かの記憶。

——その世界で少年は戦っていた。
死の臭いが辺りに満ちている。周囲に目をやれば、既に命を失った連中。

——その世界で少年は生きていた。
悲しげに自分を見つめる少女を想う。生きる。生きることしかできない。

——その世界で少年は求めていた。
どれだけ生活が変わろうと、何かが足りない気がした。埋まらない心の隙間。……求めている。何かを。誰かを。

ただ一つだけを。

そんな、遠い世界での、誰かの記憶。

——それは、鏡界という世界での、久遠輝の記憶。

その中で、また、光る欠片を見つけた。
あれが鏡界の久遠輝が求めていたもの。
まばゆい光が、世界一面に広がった。
光が散る。目はまだ慣れない。
闇が出る。次第に浮かび上がってくる形。

今度こそ分かる。

その先に待っていたものは――

「ただ一人のための、力。――それが、“俺”の求めていたもの」

そう、鏡界の久遠輝が呟いて。

爆風に踊らされていた彼の体は、永い眠りから覚めて、意識を取り戻した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9901w/>

Hide-and-Seek

2011年12月25日16時45分発行